

国道210号バイパス（木の上工区）  
建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

ガラス遺跡  
植田市遺跡  
植田条里遺跡

1997年3月

大分県教育委員会

## 序 文

大分市穂田地区は、市中心部に近いにもかかわらず農村景観を色濃く残す地区です。この地区を東西に貫く国道210号線バイパス工事に先立って調査されたのがこの報告書に記された3遺跡であります。現在の集落、あるいは水田の下で数百年、数千年の間ひっそりと埋もれていた遺跡が、発掘調査を経て歴史史料として我々の共通の財産となったのです。この地域がどのようにして、どのような経緯で現在の農村景観を呈するようになったのか、我々は遺跡の記録保存を行い、それを考えるきっかけを得たわけであります。

この報告書が今後十分に活用され、地域の歴史の掘り起こしに繋がれば喜ばしい限りであります。最後になりましたが、調査にご協力していただいた多くの方々に対しまして、衷心より御礼申し上げます。

平成9年3月31日

大分県教育委員会

教育長 田 中 恒 治

## 例 言

1. 本書は平成2年度から同5年度にかけて調査された大分市稲田地区に所在するガランジ遺跡、稲田市遺跡、稲田条甲遺跡の三遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は大分土木事務所がおこなう一般国道210号線バイパス（木の上工区）建設工事に先立って行われたものである。
3. 遺構の実測は調査員が行い、遺物の実測は調査員のほか志満史郎、末吉香代（以上大分県文化課嘱託）が行った。遺構写真の撮影は、各遺跡の担当者がおこない、遺物写真は藤田大祐（フジタフォトサービス）が撮影した。
4. 本書の執筆は第4章を綿貫俊一、第5章を吉田寛、他を小柳和宏（以上大分県文化課）が行った。付章については各項に執筆者を記している。
5. 本書の編集は小柳和宏が行った。

# 本文目次

第1章	はじめに	
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査の経過	1
3.	調査団の構成	2
第2章	遺跡の立地と環境	
1.	地理的環境	3
2.	歴史的環境	3
第3章	調査の概要	
1.	調査区の設定	5
2.	遺構の分布	5
第4章	ガランジ遺跡の調査	
1.	調査の概要	6
2.	遺構と出土遺物	7
3.	小 結	10
第5章	植田市遺跡の調査	
1.	既往の調査と調査の概要	13
2.	発掘調査の成果	17
3.	ま と め	33
第6章	植田条里遺跡の調査	
1.	調査概要	38
2.	遺構と遺物	39
3.	小 結	63
第7章	まとめ	
	植田地区の開発史	65
付 章		
付章1.	植田条里遺跡の水田開発に関する考察	73
付章2.	「賀来・城遺跡」の中世土器	77
付章3.	プラント・オーバー分析による埋没水田の可能性の検討	98
付 図		
	水路系統、小字切り図 (1:10,000)	

## 挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	4
第2図	調査地点	5
第3図	調査団位置図	6
第4図	a区遺構配置図	6
第5図	溝1実測図	8
第6図	溝1土層断面図	9
第7図	住居跡実測図	9
第8図	b区遺構配置図	10
第9図	溝2土層断面図	10
第10図	住居跡出土土器	11
第11図	ガランジ遺跡遺構出土遺物	12
第12図	稲田市遺跡周辺地形図	14
第13図	稲田市遺跡全体図	15~16
第14図	1991年度調査区全体図	17
第15図	SK1実測図	17
第16図	SK1出土遺物	17
第17図	SH1実測図	18
第18図	SH1出土遺物	19
第19図	SD2土層断面図	20
第20図	SD2出土銅銭	20
第21図	SD1出土遺物①	20
第22図	SD1出土遺物②	21
第23図	SD1出土遺物③	22
第24図	SD1出土遺物④	24
第25図	SD1出土遺物⑤	25
第26図	SD1出土遺物⑥	25
第27図	SD1出土遺物⑦	26
第28図	1992年度調査区	27
第29図	SA1・SB1実測図	27
第30図	SB2・SB3実測図	28
第31図	1992年度調査区出土遺物	30
第32図	1990年度調査区	31
第33図	SD6土層断面図	31
第34図	SD6出土遺物	31
第35図	SX1・SX2出土遺物	32
第36図	その他の遺物①	32
第37図	その他の遺物②	32

第38図	国道210号線バイパス建設に伴う稲田市遺跡の時期別遺構	34
第39図	弥生時代後期末～古墳時代前期の遺構	35
第40図	古墳時代中期の遺構	35
第41図	中世の遺構	36
第42図	近世の遺構	36
第43図	調査区位置図(その1)	38
第44図	調査区位置図(その2)	39
第45図	B区溝1実測図	39
第46図	B区溝1出土遺物	39
第47図	B区溝2、3実測図	40
第48図	D区遺構配置図	40
第49図	溝1、2、3実測図	41
第50図	D区溝4と長方形土坑実測図	41
第51図	D区溝1出土土器実測図(1)	42
第52図	D区溝1出土土器実測図(2)	43
第53図	D区溝1出土土器実測図(3)	44
第54図	D区溝1出土土器実測図(4)	45
第55図	D区溝1出土土器実測図(5)	46
第56図	D区溝1出土土器実測図(6)	47
第57図	D区溝1出土土器実測図(7)	48
第58図	D区溝1出土土器実測図(8)	49
第59図	D区溝1出土石器、鉄器	49
第60図	D区溝2、4出土土器実測図(1)	50
第61図	D区溝2、4出土土器実測図(2)	51
第62図	D区長方形土坑出土土器実測図	52
第63図	D区第1号住居跡実測図	53
第64図	D区第2号住居跡実測図	54
第65図	D区第3号住居跡実測図	54
第66図	D区第4号住居跡実測図	55
第67図	D区住居跡出土遺物実測図(1)	55
第68図	D区住居跡出土遺物実測図(2)	56
第69図	D区出土土器	57
第70図	E、F区遺構配置図	57
第71図	E、F区水田層出土土器	58
第72図	F区畦畔の状況	59
第73図	F区南壁土層断面図	60
第74図	H区遺構配置図	61
第75図	H区溝1、2、3実測図	61
第76図	H区溝1、2、3、4出土遺物実測、拓本図	62
第77図	H区第4号溝実測図	63
第78図	H区第5号溝実測図	63
第79図	種田条里遺跡の古墳時代水田の広がり	64

第80図	大分川下流域の微地形分類図（千田氏原図）	65
第81図	出田氏による条里の復元	67
第82図	七瀬川流域の水路図	68

〈付章1〉

図1	プラント・オパール定量分析手順	73
図2	D-1区土壌のプラント・オパール密度から推定した植物量	74
図3	F区土壌のプラント・オパール密度から推定した植物量	75
図4	D-1区土壌のプラント・オパール密度から推定したイネ	75
図5	F区土壌のプラント・オパール密度から推定したイネ	75

〈付章2〉

第1図	賀来・城遺跡位置図	78
第2図	賀来・城遺跡周辺地割図	80
第3図	賀来・城遺跡発掘区設定及び主要遺構分布図	81
第4図	主要遺構分布図	82
第5図	中世の溝状遺構図	82
第6図	弥生・古墳・古代の遺物	84
第7図	土師質土器①	86
第8図	土師質土器②	87
第9図	土師質土器③小皿	88
第10図	土師質土器 環 法量グラフ	89
第11図	土師質土器 小皿 法量グラフ	90
第12図	青磁・白磁	90
第13図	土師質土器法量組成	91
第14図	12世紀における大分平野の小皿変化の方向性	95

〈付章3〉

図1	プラント・オパール定量分析手順	98
図2	賀来・城遺跡土壌のプラント・オパール密度から推定した植物量	99

## 表 目 次

第1表	江戸時代の各村高変遷表	3
第2表	遺跡一覧表	4
第3表	1992年度調査区遺構一覧	29
〈付章1〉		
表1	植物体中の珪化機動細胞密度	76
〈付章2〉		
第1表	土師質土器一坏一の属性観察表	92
第2表	土師質土器一小皿一の属性観察表	93
〈付章3〉		
表1	植物体中の珪化機動細胞密度	98



## 第1章 はじめに

### 1. 調査に至る経緯

野津原方面から大分市に抜ける国道210号線は、大分市の西に広がる植田の平野部の裾を通過して大分市に入る。植田地区は道路幅が狭く、周辺部の団地造成による人口増とあいまって、慢性的な交通渋滞を起こしていた。そこで、大分県大分土木事務所では、平成2年度から国道210号線のバイパス工事を行なうこととなった。そこで、大分県文化課では、国道210号線と国道442号線の分岐する大分市木の上から、大分市大字玉沢の七瀬川の橋梁部分までの長さ約2\*について、平成2年度から試掘調査に入るようになった。この地区は従来「植田条里」、「玉沢条里」と呼ばれている周知の遺跡であるが、狭義の埋蔵文化財についてはほとんど知られていなかった。試掘調査は、遺跡の存在が予想される部分に重機による試掘トレンチ（幅約2m）を設定し、基本的に表土を除去する方法で行い、一部についてはかなり深くまで掘削を行なった。

その結果、以下に調査の経過を詳述する3箇所では遺構が検出され、本調査を実施することになった。

### 2. 調査の経過

#### ガランジ遺跡

平成2年10月に表土剥ぎ開始。引き続き、遺構の検出、掘下げを行い、11月下旬に調査終了。

#### 植田市遺跡

植田市遺跡は3か年にわたって調査された。

（平成2年度）

平成2年12月に表土剥ぎ開始。平成3年1月上旬に遺構検出を完了した。引き続き、遺構の掘下げを開始し、3月下旬までに完掘した。

（平成3年度）

平成4年1月下旬に表土剥ぎ開始。2月より、遺構の掘下げ作業を開始する。3月上旬に完掘・実測等の現地作業を完了する。

（平成5年度）

調査対象地のうち、南側の一部を5月19日、重機により表土剥ぎを行なう。5月25日より、遺構の掘り下げ作業を開始する。5月28日、完掘し写真を撮る。

残りの調査区に9月13日、重機を入れて表土剥ぎ開始。9月17日、遺構検出写真。20日より遺構掘り下げ開始。10月6日、全体写真を撮影し、調査終了。

#### 植田条里遺跡

平成5年4月12日、植田条里遺跡のH区から調査に入った。重機により、基本的に地山面（遺構検出面）まで掘削を行ない遺構の確認に努めたが、H区の西側では、水田層が広がり、柱穴や住居跡などの遺構はまったく検出されなかった。

4月23日には、H区の調査と平行してF区の表土剥ぎも開始した。4月27日には、試掘調査によって溝と考えられていた遺構が、水田畦畔の可能性が高いことが分かり、水田遺構の検出に力を注ぐ。土層断面にも畦畔状の盛り上がりを確認。

5月に入ると、雨の日が多くなり、水汲み出し作業が多くなる。5月13日、大分短期大学佐々木章先生、F区の土層断面より、プラントオパール分析のための資料を採取。

6月3日、佐々木先生、再び来跡され、資料を採取。6月7日、F区の遺物出土写真を撮る。H地区は、6、7月と横の水路からの漏水と雨水の侵入で、月の半分くらいは作業ができなかった。

8月17日、E区の表土剥ぎに入る。9月2日にはD区の表土剥ぎも開始する。いずれも水田層の存在が推測できる部分。9月3日、台風13号の襲来で調査区がすべて水没する。9月6、7日にはJ区（もっとも東側の地点）の試掘調査を行なうが、遺構なし。9月10日、D区にはほとんど水田層が広がらないことがわかる。

10月に入ると、D区の溝掘り下げが続く。11月2日から5日まで、B区の表土剥ぎを行なう。B区は溝が2条検出されたのみ。11月30日、遺構の実測を行い調査終了。11月26日からは、D区の北側部分の表土剥ぎを開始。

12月1日にはD区において住居跡2棟確認。

### 3. 調査団の構成

調査団の構成は以下の通りである。

事業主体 大分県教育委員会

調査指導

後藤宗俊（別府大学教授）

佐々木章（大分短期大学助教授）

調査員

渋谷忠章（大分県教育委員会文化課主幹兼埋蔵文化財第2係長）

高橋 徹（ ” 埋蔵文化財第2係主査）

小柳和宏（ ” 埋蔵文化財第2係主任）

綿貫俊一（ ” ）

吉田 寛（ ” ）

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 1. 地理的環境

遺跡は大分市の南の郊外に開ける平野部にある。北と西を木の上の丘陵により、南は霊山などの山々により、東は七瀬川により画された南北 $0.5^{\circ}$ 、東西 $2^{\circ}$ ほどの標高17m~12mの平野である。平野は桑本のあたりで屈曲し「く」字状になる。その屈曲点を境にして上流側は「植田地区」、下流側は「宗方地区」と呼称されている。

現在七瀬川は南の霊山の麓側を流れているが、平野部には旧河道を確認することが出来る。二十年程前に七瀬川の堤防が高く築かれるまではしばしば氾濫を起こしており、特に桑本はしばしば水に浸かった。現在、旧河道は図80のように確認されている。それによると、やはり平野の南側を流れることが多く、口戸のところで大きく北流することがあったことを示している。この部分には条里地割りが認められず、河道の移動に伴うものである可能性もあろう。

### 2. 歴史的環境

この平野部は、大分川下流域ではかなり安定した広い平野である。江戸時代には上流側から口戸村、木の上村、市村、桑本村、栗野村、雄城村、下宗方村、上宗方村があった。それぞれの村の石高は表の通りである。各々の村の中心部は、現在市街化されてきて乱れてきてはいるが、集落の核となる部分があり完全な集村形態を示していた。そして、その村の入り口（境界）には江戸時代前期から中期にかけて六地藏石幢が立てられていた。これらの村の中心部が何を基盤に成立したかは具体的に知れる資料はないが、多くは「〇〇屋敷」の地名を残すことから、中世のある段階から「屋敷」などを中核として集村化をとげ、ムラノラーヤマといった三重構造を確立していった地域であったことが推測できる。今回の発掘調査はまさにその「ノラ」の部分の部分を長さ約 $2^{\circ}$ にわたって掘り抜くものである。

中世、この地は藤原頼長領、後に後院領となる植田荘の成立によって形成されたもので、本来は開発領主と推測される大神氏（植田氏）の開発になるものであった。後に植田氏は地頭として各名の経営にあたる。ただし、鎌倉時代中期以降は守護大友氏の干渉を受け、植田惣領家は実質的に大友系となる。そして、戦国時代にはその植田氏も滅亡し、この植田荘は大友家臣の給地として分与されることになる。

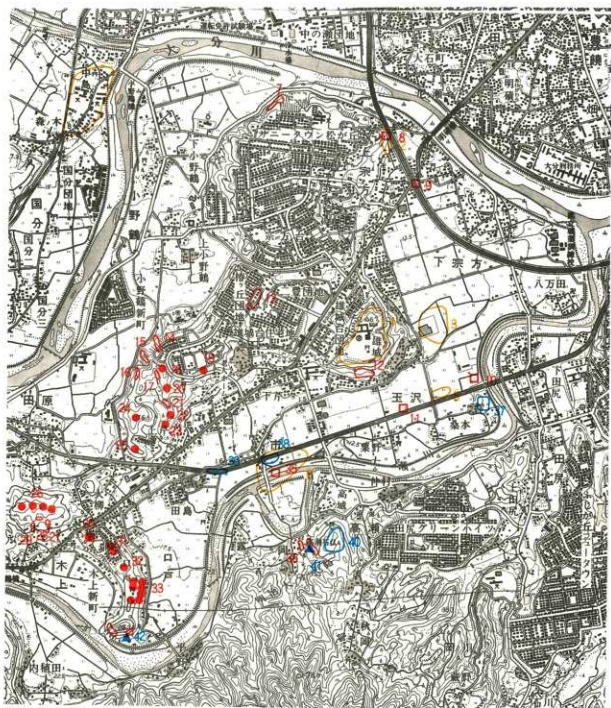
それより以前の古代については植田郷が成立しているが、詳細は知れない。古墳時代以前は、丘陵上に古墳や集落が築かれるものの、沖積地についてはほとんど遺跡が知られていない。

第1表 江戸時代の各村高変遷表

単位は「石」

村名 時期	口戸	木ノ上	市	下宗方	上宗方	桑本	栗野	雄城
	延岡藩領	延岡藩領	臼杵藩領	臼杵藩領	臼杵藩領	臼杵藩領	延岡藩領	延岡藩領
正保	372	363	531	416	419	218	173	223
天保	382	379	349*	427	431	224	173	224
明治	376	371	-			-	-	224

\* 世利門村を分村のため減少



(黄色 弥生時代、赤色 古墳時代、青色 中世～近世)

第1図 遺跡位置図 (1:25,000)

第2表 遺跡一覧表

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	賀来中学校遺跡	15	大曾3橋穴墓群	29	志土地橋穴墓群
2	北の池遺跡	16	大曾3橋穴墓群	30	木ノ上古墳石積墳
3	渚町遺跡	17	大曾3橋穴墓群	31	御陵古墳
4	原城舎遺跡	18	六ヶ部塚古墳	32	千人古墳
5	瀬田富里遺跡H区	19	平野前古墳	33	浅草神社古墳群
6	瀬田富里遺跡I区	20	成瀬前古墳	34	岩崎橋穴古墳
7	小北野鶴橋遺跡	21	高瀬山古墳	35	瀬田富里遺跡
8	小北野鶴橋遺跡	22	高瀬山古墳	36	高瀬橋穴墓群
9	六反田遺跡	23	世利門古墳	37	桑木古墳
10	瀬田富里遺跡	24	大曾3橋穴墓群	38	瀬田富里遺跡
11	瀬田富里遺跡I区	25	大曾3橋穴墓群	39	カウシ遺跡
12	瀬田富里遺跡II区	26	山伏古墳群	40	高瀬山古墳
13	瀬田富里遺跡III区	27	土肥橋穴墓群	41	高瀬山古墳
14	大曾3橋穴墓群	28	木ノ上橋穴墓群	42	白戸古墳

## 第3章 調査の概要

### 1. 調査区の設定

この国道210号線バイパス工事にともなって、大分県文化課では遺跡の存在する可能性の高い地区について試掘調査を行うこととした。各地区は、基本的に小字をつけて地区名としたが、「植田条里遺跡」は周知遺跡であったことから小字によらず、「植田条里遺跡」とした。また、「植田市遺跡P区」は隣接地域で大分県文化課が河川改修工事にともなって「植田市遺跡」を調査しており、その一連の遺跡ということで「植田市遺跡〇〇年度調査区」という呼称になっている。

試掘調査の結果、遺跡と確認されたのはルートの西側から「ガランジ遺跡」、「植田市遺跡」、「植田条里遺跡B、D、E、F、H区」である。

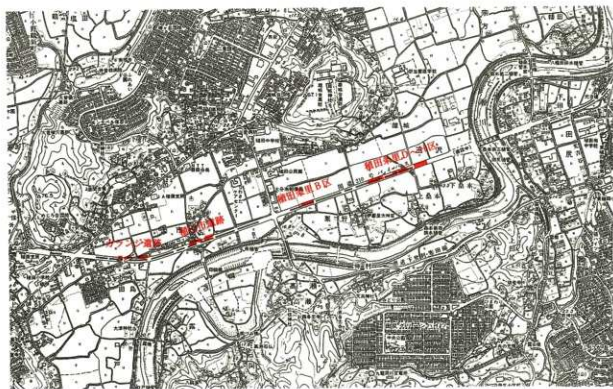
### 2. 遺構の分布

各遺跡の詳細は次章以下で触れるので、ここでは各遺跡の概要について簡単に説明する。

ガランジ遺跡は、弥生時代の住居跡1基と中世の溝が2条確認された。溝は現在の「古井路」に並行するもので、その前身である可能性があるものである。

植田市遺跡は、1987年から1991年にかけて河川改修工事にともなって調査された植田市遺跡の北側に位置し、その関連遺構が検出されるかと想定された遺跡である。しかし、検出された遺構は古墳時代前期の住居跡1基と溝1条、さらに近世の屋敷遺構であった。その他に縄文時代晩期の土器包含層が調査された。

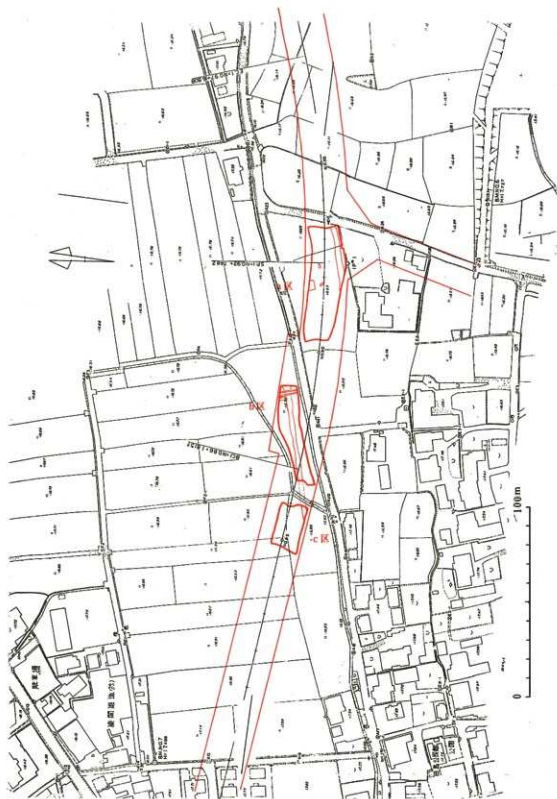
植田条里遺跡は、広大な面積に及ぶ「条里」遺構の一部を調査したものであったが、条里の成立に係わる遺構は検出できなかった。調査した遺構は弥生時代後期の溝、古墳時代前期の溝と住居跡、古墳時代後期の水田遺構である。



第2図 調査地点

## 第4章 ガランジ遺跡の調査

### 1. 調査の概要



第3図 調査団位置図



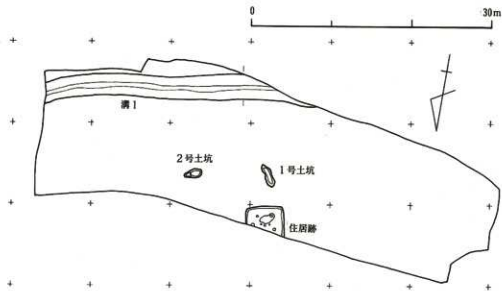
調査地区は大分市大字口戸字ガランジから大字木の上帝手にかけての長さ200mの範囲である。ちょうど、市の集落を東西に貫く道を挟んでその両側を調査したことになる。周辺の試掘調査の結果によると、調査対象地区の東側は段丘崖と考えられる低地部分があり、遺構の存在は確認できなかった。西側にも遺構の広がり確認できなかった。

調査はa、b、cの3カ所に分けておこなった。その結果、a区からは溝1条と弥生時代後期の住居跡1基、時期不明の土坑2基、b区からは溝が1条検出された。c区はb区の溝の続きが一部確認されたのみである。

## 2. 遺構と出土遺物

### a区

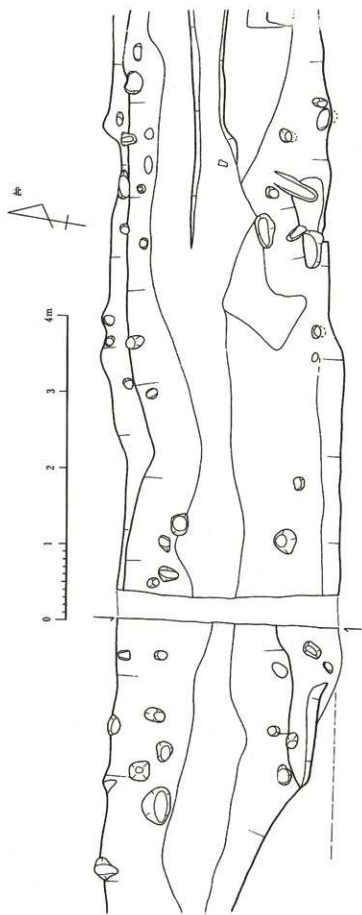
a区は「市」の集落がのる微高地の縁辺部にあたる。検出された遺構は、溝と住居跡、そして2基の土坑である。



第4図 a区遺構配置図

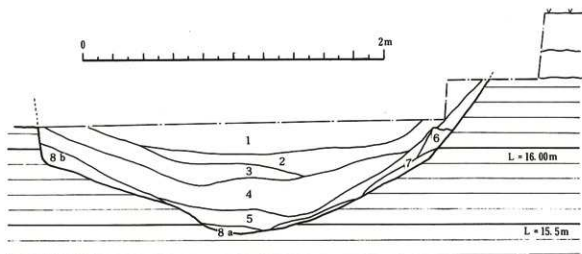
### (溝1)

溝はほぼ東西方向に伸びており、上端幅2.3mで深さは検出面から約55cmのゆるやかなV字形を呈している。堆積状況は、基本的にシルトと砂層の互層になっており、水流があったことを示している。溝の肩部には杭痕と考えられるピットが多数見られた。出土遺物は第11図19から26で、弥生時代後期中世の遺物が出土している。溝の時期は、最も時期が下る火鉢（第11図26）の15世紀後半から16世紀以降ということになるが、底から12～13世紀の白磁（第11図25）が出土しており、掘削時期はさかのぼることが推測される。



第5図 溝1実測図



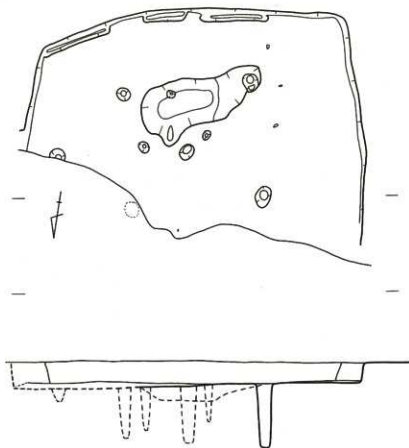


第6図 溝1土層断面図

(住居跡)

調査区北壁に半分がかかっており全形は窺い知れないが、東西3.5mである。主柱穴は4カ所で、それから復元すると南北は2.4mほどになる。南側主柱穴の間には、焼土の堆積した炉跡がある。また、南側壁際には壁溝が一部残っている。

出土遺物は比較的多く、第10図に示す通りである。1から7はいわゆる安国寺式土器の壺で、11から17は甕である。安国寺式土器は、口縁部に波状文を有し、胴部の突帯は2から3条である。甕の底部は平底からわずかに上げ底状を呈している。これらの特徴から弥生時代後期中葉とすることができる。



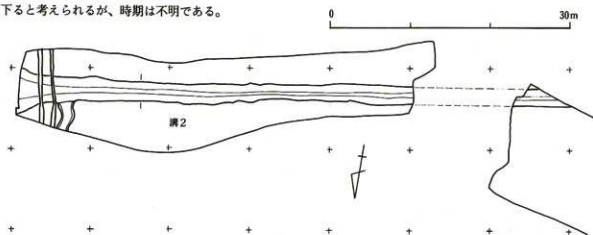
第7図 住居跡実測図

b区

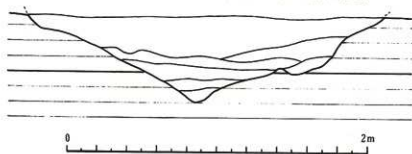
(溝2)

現在の道路に並行する位置で検出された溝で、幅2.2mで深さ0.6mのゆるやかなV字形を呈する。下半には砂層が見られ、水流があったことを示している。

出土遺物は少なく、形状のわかるものは弥生時代後期中頃の壘底部だけであるが、状況から考えて中世にまで下ると考えられるが、時期は不明である。



第8図 b区遺構配置図



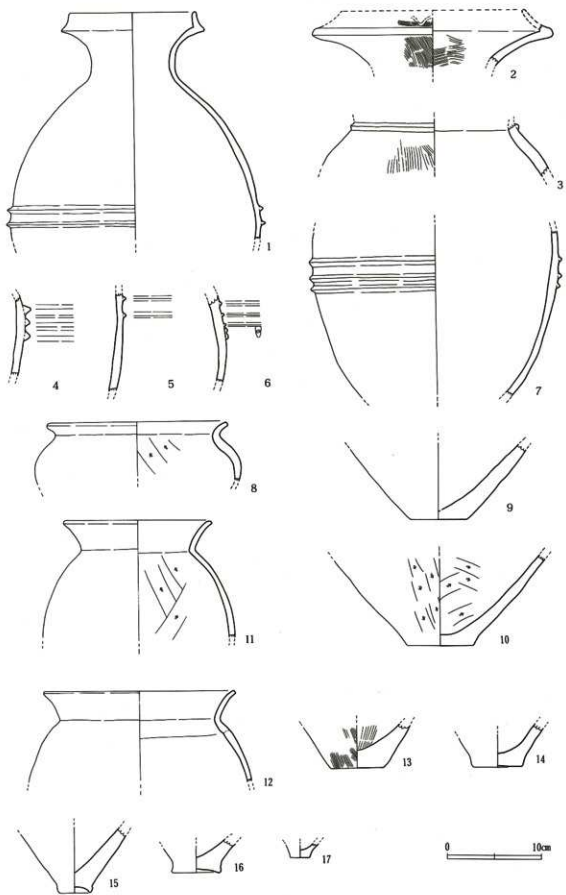
第9図 溝2土層断面図

3. 小 結

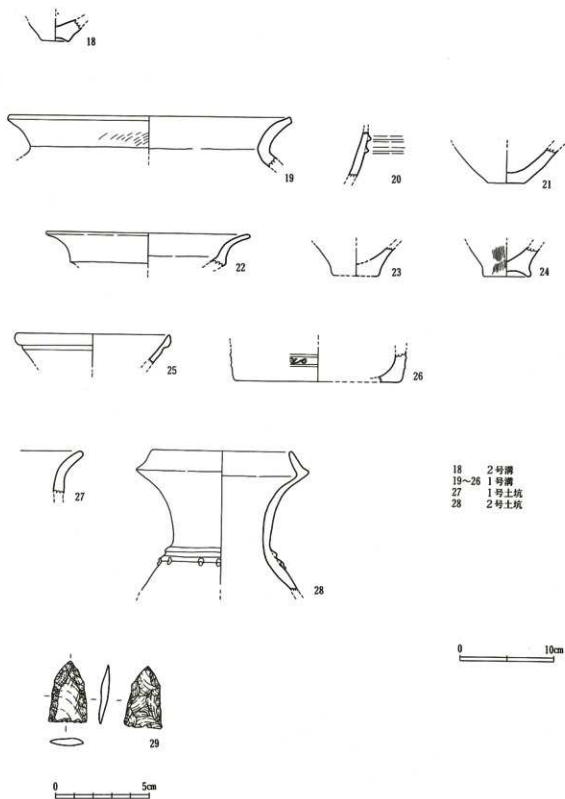
ガランジ遺跡は、古井路が横を流れる現道を横切る形で調査区が設定された。残念ながら現道部分は調査ができなかったが、中世と考えられる2条の溝と、弥生時代後期の住居跡1基が検出された。

弥生時代後期の住居跡は1基のみ検出されたが、集落としては北側に展開する可能性が高い。

中世の溝は現在の「古井路」に並行するもので、その前身である可能性が高い。溝1の東側延長線上には段丘崖となっていることから考えると、溝1が段丘崖の形成によって機能しなくなったために、新しい北方に水路(溝2)の付け替えを行った可能性が高いと言える。溝1の西側延長線の痕跡は、現地割りで100m近く確認できる。この部分で現道もやや北に振れており、段丘崖の形成がやはり影響していると考えられる。溝1からは12~13世紀に属する白磁が出土しており、段丘崖の形成はその後である。



第10図 住居跡出土土器



第11図 ガランジ遺跡遺構出土遺物

## 第5章 植田市遺跡の調査

### 1. 既往の調査と調査の概要

植田市遺跡は大分県大分市大字市に所在し、大分川の支流である七瀬川流域北岸の沖積低地に立地する（第12図）。周辺には古代の条里遺構が残存しているといわれ、植田市遺跡も植田条里遺跡として広範囲に周知されている領域の一画に位置している。植田市遺跡では、建設省による七瀬川河川改修工事に伴い、1998年度から1991年度の5年間にわたって、大分県教育委員会を主体とした発掘調査が行なわれている。七瀬川河川改修工事に伴う発掘調査区は、今回報告する国道210号線バイパス建設に伴う発掘調査区の南約50mに位置しており、約35,000㎡が調査されている。その結果、植田市遺跡は縄文時代晩期末から近世にかけての複合遺跡であることが判明しており、検出された縄文時代晩期の刻目突帯土器やカマドを有する古墳時代中期の住居跡および中世の屋敷跡などは、本地域の指標となりうる遺構・遺物である<sup>(1)</sup>。

今回以下で報告するのは、国道210号線バイパス建設に伴う植田市遺跡の調査概要である（第13図）。当該バイパス建設に伴う植田市遺跡の調査の内容を紹介するのは、今回が初めての機会となるが、本報告をもって正式報告となすものである。発掘調査はバイパス建設予定地を一度に調査したわけではなく、用地買収状況と工事進捗状況に応じて一定面積を試掘・本調査の対象とし、最終的には1990年度から1992年度の3年間に渡って、断続的な調査を行なうこととなった。試掘調査はバイパス建設予定地全域を対象にし、その試掘調査の結果に基づいて、遺構・遺物の分布する幅約22m、延長約138mの約3,000㎡を本調査の対象とした。ただし、上記の面積のうち、現用の里道下や舗装道路下の一部は本調査対象外とした部分がある。各年度の調査対象面積と検出した遺構は、以下の通りである。

1990年度 弥生時代終末から古墳時代前期の包含層と11～12世紀（？）の溝1条を検出。

調査面積約1,600㎡。

1991年度 古墳時代前期の土坑1基、古墳時代後期の住居跡1棟、中世および近世の溝各1条ほかを検出。

調査面積約900㎡。

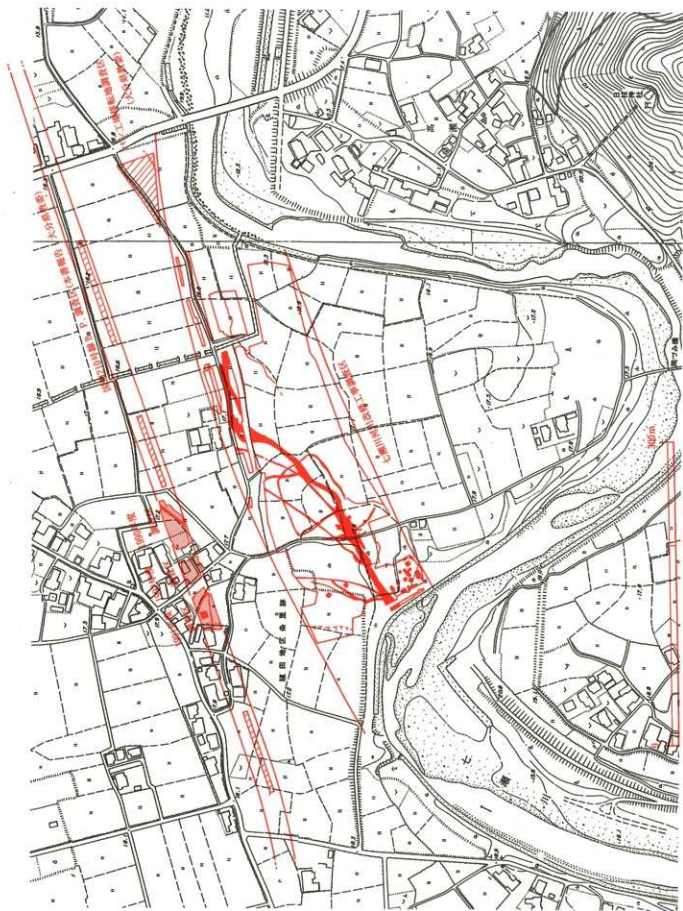
1992年度 掘立柱建物3棟、櫓列、土坑、井戸4、溝5条を検出。掘立柱建物のうちの一部が中世にさかのぼる可能性があるが、他の遺構はすべて近世以降に比定される。

調査面積約500㎡。

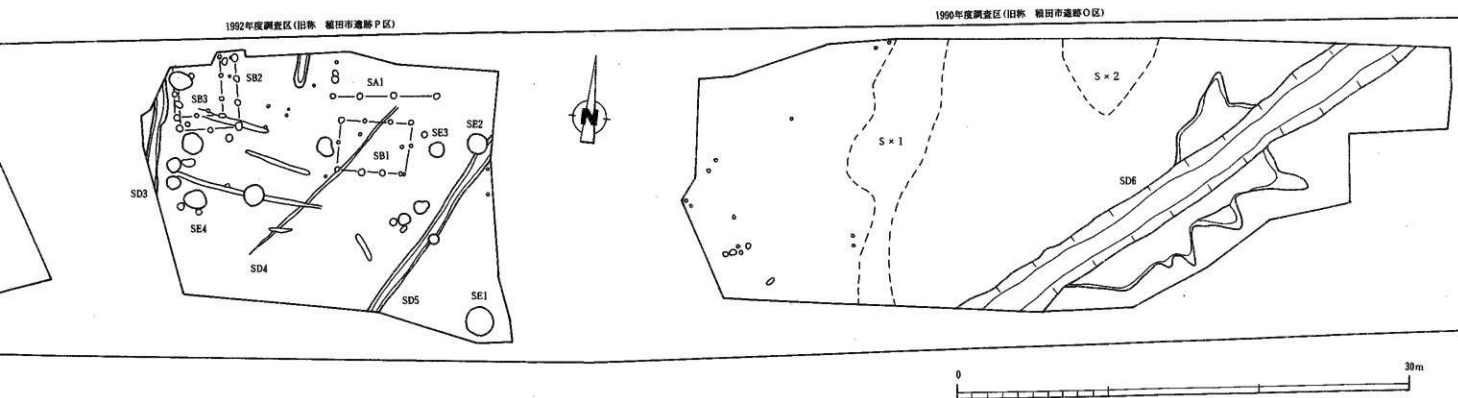
なお、発掘調査当初は七瀬川河川改修工事の調査区との関連から、1990年度調査区を植田市遺跡O区、1991年度調査区を同N区、1992年度調査区を同P区と仮称していた。これらの調査地区名は河川改修工事の発掘調査の長期化に伴い、統一がとれず系統的なものでなくなったため、本報告ではアルファベットによる地区名は採用せず、調査年度を基準とした記述を行いたい。

以下、今回の調査で検出された遺構・遺物の詳細を紹介する。

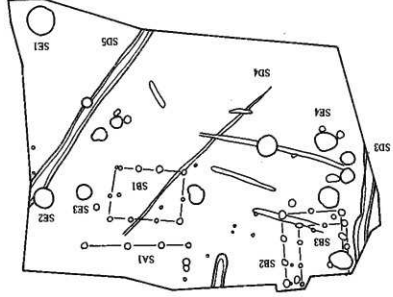
註(1) 大分県教育委員会『植田市遺跡』I～V(1988～1992年)



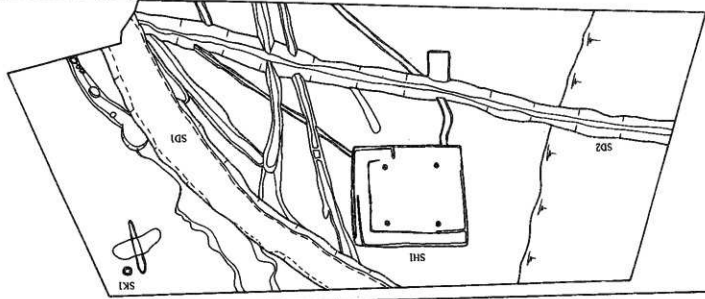
第12図 植田市遺跡周辺地形図



第13図 穂田市遺跡全体図 (S=1/250)

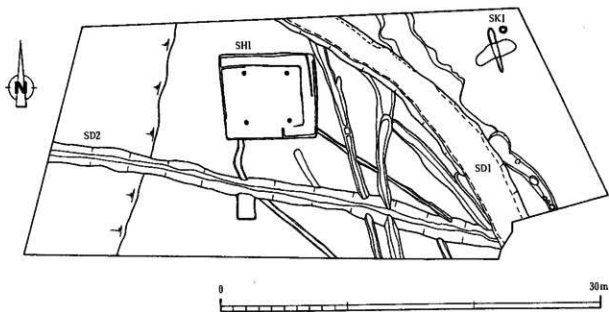


1992年調査区(旧跡) 徳田市遺跡P区



1991年調査区(旧跡) 徳田市遺跡N区





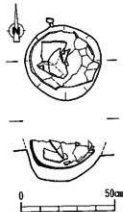
第14図 1991年度調査区全体図 (S=1/300)

2. 発掘調査の成果

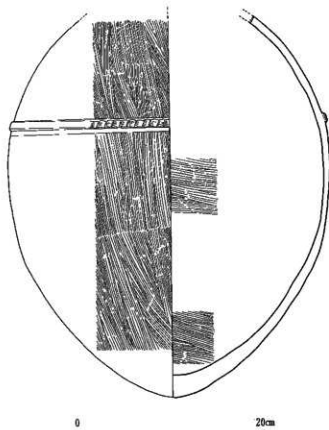
(1) 1991年度調査区 (第14図)

概要 1991年度調査区は、国道210号線バイパス建設に伴う穂田市遺跡の調査区の東側に位置する。発掘調査当初は、七瀬川河川改修工事に伴う調査区との関連から穂田市遺跡N区と呼称していた。調査面積は約900㎡である。古墳時代前期の土坑1 (SK1)、中期の住居跡1 (SH1)、中世の溝1 (SD2)、近世の溝1 (SD1) などが検出されている。

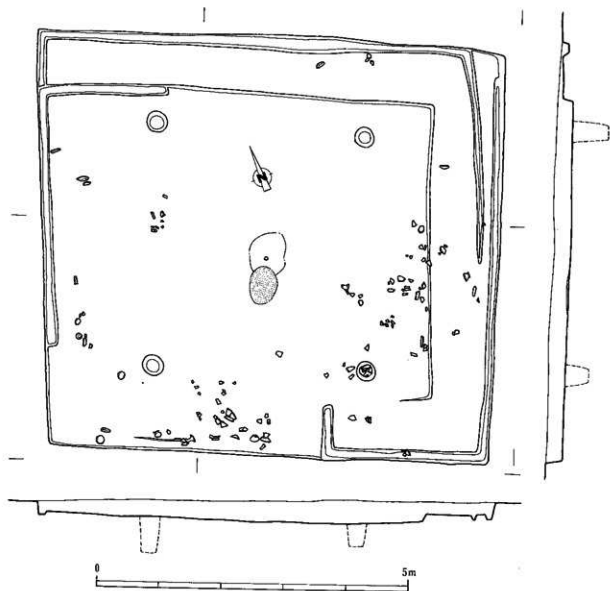
SK1 (第15図) 調査区北西隅付近で検出した土坑で、径約0.4m、深さ約0.15mを測る。土坑内部からは、土師器の壺形土器の底部から胴部にかけての部位が出土している。遺構と出土遺物の状態から、上面がかなり削平されているものと思われるが、本来は完形品であった壺を斜め約40度の角度で土坑内に安置していた状況が復元される。小児用の埋葬遺構と思われる、古墳時代前期に比定される。



第15図 SK1 実測図 (S=1/20)



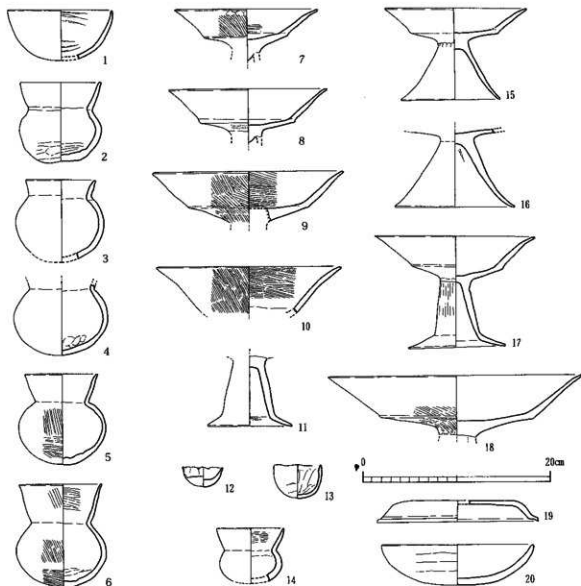
第16図 SK1 出土遺物 (S=1/4)



第17図 SH1 実測図 (S=1/60)

**出土遺物** 第16図は土師器の壺である。現状では口縁部から肩部を欠損しており、胴部上位にはベルト状突帯をめぐらす。器壁の内外面には刷毛目が施されている。弥生時代後期以降に発達する在地型の複合口縁壺の形態で、古墳時代前期の布留式古段階に比定される。

**SH1 (第17図)** 調査区はほぼ中央部で検出した住居跡である。住居跡は南北6.7m、東西7.4mを測る方形プランを呈する。床面積は49.6㎡で、当該時期の住居跡としては、かなり大型の部類に入る。北・西・南壁にいわゆるベッド状遺構を設け、壁溝が認められる部位もある。主柱穴は4本で、住居跡中央部には焼土と炭化物の分布が認められる。なお、炭化物の分布域の上部にミニチュア土器(第18図16)1個が伏せられた状態で出土しているが、これが意味のある行為かどうか不明である。出土遺物から、住居跡の時期は古墳時代中期の5世紀前半から中頃に比定される。また、住居跡埋土中から8世紀代の土器(同19・20)が出土しており、発掘調査中は判別できなかったものの、これらの出土地点付近に奈良時代の遺構(土坑やピットなど)が切り合っていた可能性が考えられる。



第18図 SH1 出土遺物 (S=1/4)

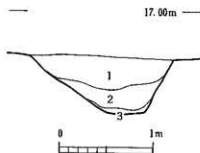
出土遺物(第18図) 1~18はSH1の所属時期を示す一括出土遺物である。1は土師器鉢、2~6は丸底の小型壺、7~15は土師器高坏、16~18はミニチュア土器である。このうち、16は住居跡のほぼ中央部に分布する炭化物の直上に伏せられた状態で出土した。以上の一括出土遺物は個々の土器の形態や土器群の構成に高坏が多いこと、さらに須恵器の出土が認められないことから、古墳時代中期の5世紀前半から中頃に比定されよう。19は土師器蓋で、口縁端部はくちばし状を呈する。20は土師器碗で、器壁外面に手持ちのへう削りが認められる。19・20は8世紀代に比定される遺物で、上記の古墳時代中期の土器群と大きく時期を異にすることから、これらの遺物の出土地点付近に奈良時代の遺構が存在した可能性が考えられる。

SD2 調査区を横断する形で検出された溝である。幅1.8m、長さ3.7m、深さ0.6mを測り、延長部はさらに調査区外に延びる。また、調査区南西隅付近で、近世の溝SD1と切り合い関係を有する。埋土は3層に分層されるが、最下層の粘質土には細かい砂粒が認められる部分があり、流水の痕跡を示している。埋土中より、銅銭2枚と糸切りの底部を持つ土師質土器の細片が出土しており、詳細な時期の決定はできないが、中世の所産である。

出土遺物 埋土中より出土した銅銭2枚を図示している(第20図)。1は北宋銭の淳化元宝で、初鋳年代は990年。2も北宋銭の祥符元宝で、初鋳年代は1008年である。なお、糸切りの底部を持つ土師質土器小皿が出土しているが、細片のため図示できていない。

SD1 調査区を斜めに横断する形で検出された近世の溝である。幅2.5m、長さ2.5m、深さ0.6mを測り、延長部はさらに調査区外に延びる。SD1が検出された地点は、発掘調査以前は小さな段差のある地形となっていた。溝の内部には杭が多数打たれており、水田経営に関わる水路であったことがわかる。溝理上の最上層からは、小型の携帯用の硯や木製の下駄、瀬戸美濃産磁器碗や焼継のある肥前磁器広東碗および瓦質土器燈炉等が出土しており、幕末には埋設していたことを示している。下層から出土した遺物には17世紀後半から19世紀代ものが認められ、SD1の存続時期を示すものと考えられる。量的にまとまりのみられる最も古い遺物の一群には、17世紀後半代ものが認められ、SD1の最初の掘削時期を示す遺物である可能性が考えられる。なお、発掘時は湧水が著しく、完掘を断念した部分がある。

出土遺物(第21~27図) 第21図1~3は検出面下数cmで出土したもので、最上層出土遺物として取り上げたものである。SD1の埋設時期を示唆するものと考えられる。1は瀬戸美濃産磁器染付端反碗で、製作年代は1820~1860年代に比定される。2は肥前磁器染付広東碗で、焼継が認められる。内底部には朱書きの焼継文字が描かれた痕跡が認められるが、残念ながら判読できない。製作年代は1780~1820年代。3は在地産の瓦質土器燈炉で、19世紀前半から中頃の所産である。内底部にはへう描きの記号状の沈線が認められる。第11~13図は埋土中から出土した陶磁器・土器で、SD1の存続時期を示唆するものと考えられる。第22図4・5は京焼風陶器具器手碗といわれる肥前産の陶器碗で、17世紀後半から18世紀前半に製作されたものである。6は肥前京焼風陶器碗で、18世紀前半に比定される。底部付近は露胎となり、内底部には刻印は認められない。7・8は肥前唐津系(現川系)陶器刷毛目碗で、17世紀末から18世紀前半の所産である。9~16は肥前陶胎染付碗で、17世紀末から18世紀前半に比定される。17・18は関西系陶器碗と思われ、前者は丸碗で内外面に透明釉を施す。後者はいわゆる腰折れの碗形態を呈

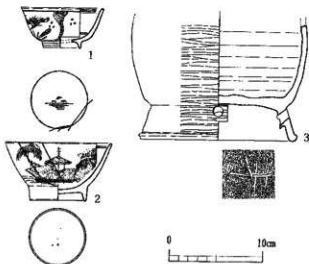


第19図 SD2土層断面図(S=1/4)

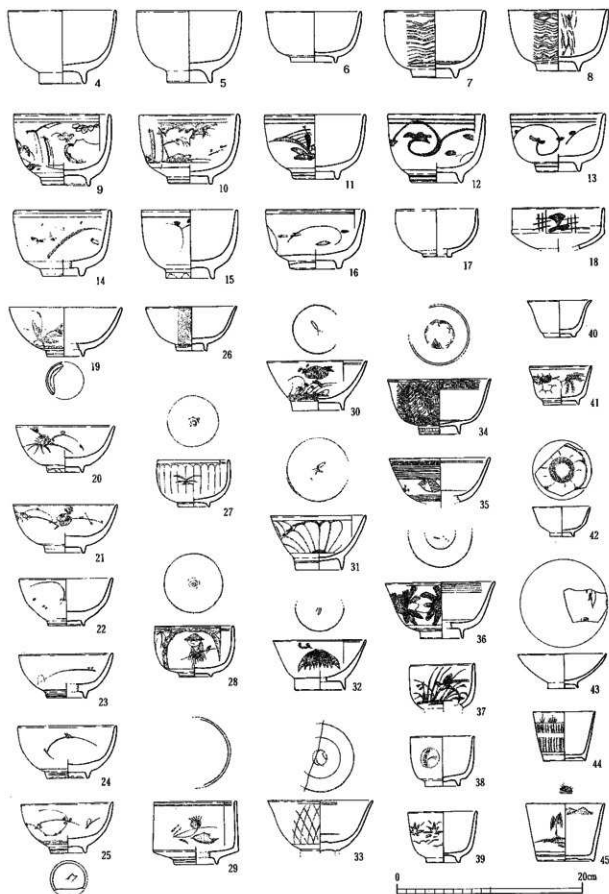
1. 茶褐色粘質土
2. 灰褐色粘質土
3. 暗褐色粘質土(砂質土を含む)



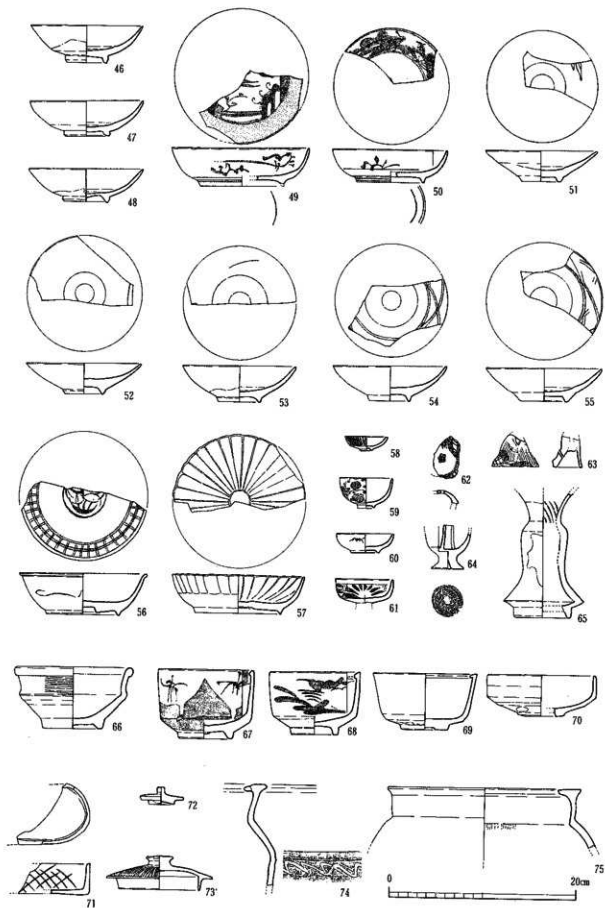
第20図 SD2出土銅銭(実大)



第21図 SD1出土遺物①(S=1/4)

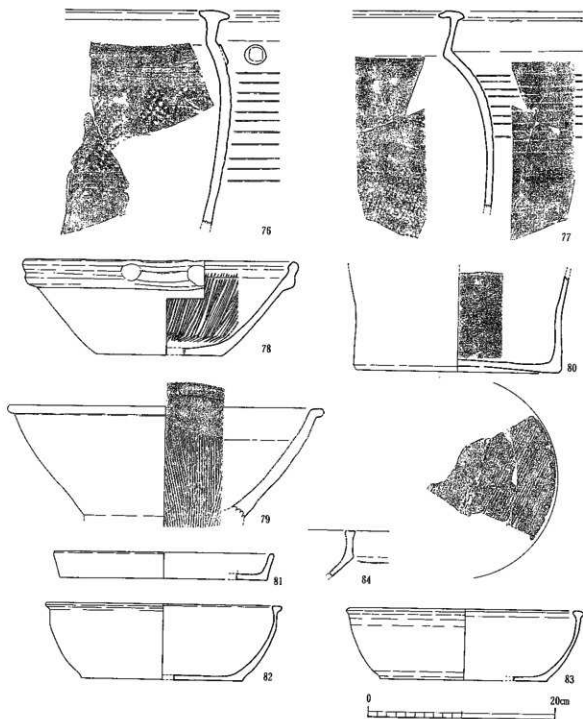


第22図 SD1出土遺物②(S=1/4)



第23図 SD1出土遺物③ (S=1/4)

し、文様は鉄絵（錆絵）で描かれている。いずれも、18世紀後半代に比定される。19は肥前磁器染付碗で、文様や呉須の発色の具合から、18世紀前半から中頃の所産であろう。20・21は肥前磁器染付碗で、外面に梅樹文を描き、見込みは蛇ノ目軸割ぎとなる。18世紀後半に比定される。22～25は肥前磁器染付碗で、いわゆる「くらわんか茶碗」と俗称される外面に簡略化した梅樹文と雪輪文を描くタイプのものである。25の内底部には大明年製崩れ銘がみられる。いずれも18世紀後半の製品である。26は肥前磁器碗で、外面に鉄軸、内面に透明軸を施す。これも18世紀後半の所産である。27・28も肥前磁器染付碗で、27の外面には菊花弁の中に草花、28の外面には竹林と竹の子を掘ろうとしている人物が描かれている。両者とも、見込みには崩れた五弁花文が手描きによって描かれている。いずれも18世紀後半から末に比定される。29は肥前磁器染付筒形碗で、これも18世紀後半から末の製品である。当該資料は焼成がやや不良で、透明軸や呉須の発色がやや不良である。30～32は肥前磁器染付広東碗で、いずれも見込みに「壽」字から脱化した記号文を描く。1780～1820年代の製品である。33～36は肥前磁器染付端反碗で、1820～1860年代に比定される。33は見込みが蛇ノ目軸割ぎとなり、34の外面文様は細線描きの手法が採用されている。また、36は同一規格同一文様の個体が、図示した以外に1個存在する。37～39は肥前磁器染付碗で、1820～1860年代に比定される製品である。なお、37は焼成がやや不良で、呉須などの発色がよくない。40・41は肥前産の磁器小杯である。前者は白磁で18世紀以降、後者は染付で19世紀以降の製品である。42は肥前磁器染付杯で、器壁が薄く作られている。見込みが蛇ノ目軸割ぎとなり、内面文様と合わせて桜花を描いたものとなっている。19世紀前半から中頃に比定される。43は肥前磁器色絵小杯で、これも器壁が薄く作られ、内面文様は赤絵で描かれている。これも19世紀前半から中頃に比定される製品である。44・45は18世紀後半以降に製作された肥前磁器染付猪口で、45は蛇ノ目凹形高台となる。第23図46～48は肥前唐津系（内野山窩系）陶器銅線軸皿で、底部付近は露胎となり、見込みは蛇ノ目軸割ぎとなる。17世紀末から18世紀前半代の製品である。49は肥前青磁染付皿で、口縁部が輪花となる。内面の無文部に青磁軸が施されている。18世紀前半に比定される。50は肥前磁器染付皿で、18世紀代の製品である。見込みに五弁花文が描かれていると思われるが、残存部が少ないため、手描きかコンニャク印判によるものかは不明である。51～53も肥前磁器染付皿で、見込みが蛇ノ目軸割ぎとなる粗製の製品である。17世紀末から18世紀代に比定される。54・55は見込みが蛇ノ目軸割ぎとなり、内面に斜線文を描く肥前（波佐見系）磁器染付皿で、18世紀後半の製品である。56は肥前磁器染付皿で、底部は蛇ノ目凹形高台（低）となる。19世紀前半に比定される。57は肥前磁器白磁菊皿で、型押しで整形され、底部はやはり蛇ノ目凹形高台（低）となる。19世紀前半から中頃の製品である。58は型押し整形により菊花を型取った形態を呈する肥前磁器白磁紅皿で、18世紀後半以降に比定される。59・60は肥前磁器染付紅皿で、これらも18世紀後半以降の製品である。61は肥前磁器色絵仏飯器で、脚部以下を欠損する。文様は赤絵で描かれている。19世紀以降の所産である。62は肥前磁器染付水滴の破片で、18世紀以降の製品と思われる。63は産地不明の陶器製の人形で、頭部を欠損する。外面の一部に緑軸と褐色の軸を施した後に透明軸が施されており、体部には斜め方向に貫通する小孔が存在する。詳細な製作時期は不詳であるが、18世紀後半以降の製品であろう。64～65は18世紀以降に比定される関西系陶器の灯火具である。64の底部には、小孔とともに糸切り痕が認められる。65の底部の打ち欠きは意図的なものである可能性が考えられる。いずれも外面に鉄軸が施されている。66は18世紀代の所産である肥前唐津系陶器香炉である。67も肥前唐津系陶器香炉と思われ、文様は鉄軸で描かれている。これも18世紀代の製品であろう。68は肥前陶胎染付香炉で、18世紀前半に比定される。69・70は関西系陶器香炉で、18世紀後半以降の製品である。なお、69の内面には灰の付着の痕跡が認められ、70は胴側面の小型の脚部が剥落した痕跡が認められる。71は関西系陶器びん壺で、これも18世紀後半以降の所産である。胴部外面には鉄泥が塗られ、体部の格子目状の文様は赤絵で描かれている。72・73も18世紀後半以降に比定される関西系陶器蓋である。72は外面に鉄軸が施され、内面および底部は露胎となる。73は土瓶の蓋で、外面に透明軸が施され、外面文様は飛びガンナによる。74～第13図77は肥前唐津系陶器壺で、いずれも18世紀以降の所産である。74は胴部上位外面に波状文を施す。76・77は胴部内外面に格子目叫きを施し、胴部外面上位に平行沈線を施している。また、76は頭部と胴部の境付近に小円形の貼り付けが認められる。18は堺産陶器播鉢（Ⅱ型式）で、18世紀後半以降の製品である。79は



第24図 SD 1出土遺物④ (S=1/4)

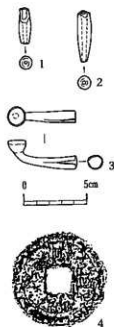
肥前唐津系陶器擂鉢で、これも18世紀後半以降に比定される。80～83は在地産の可能性が高い瓦質土器で、80は火消し窯、81は皿、82・83は鉢あるいは火鉢である。いずれも豊後府内地域周辺で、19世紀前半以降に多量に生産される器形を呈している。なお、80の底部には木目状の圧痕が認められる。84は土師質土器焙烙の口縁部で、口縁端部がやや肥厚し上面が平坦面をなす特徴は、19世紀前半以降の器形であることを示唆している。

第25図1・2は土製の管状土垂である。3は青銅製の煙管で、基部に一部損傷が認められる。4は摩滅が著しいが、寛永通寶の鉄銭である。第15図5～8は木器である。5・6は下駄で、サイズが小さいことから小児用もしくは女性用のものと思われる。5・6の下駄はいずれも最上層からの出土遺物である。7は用途不明の加工品

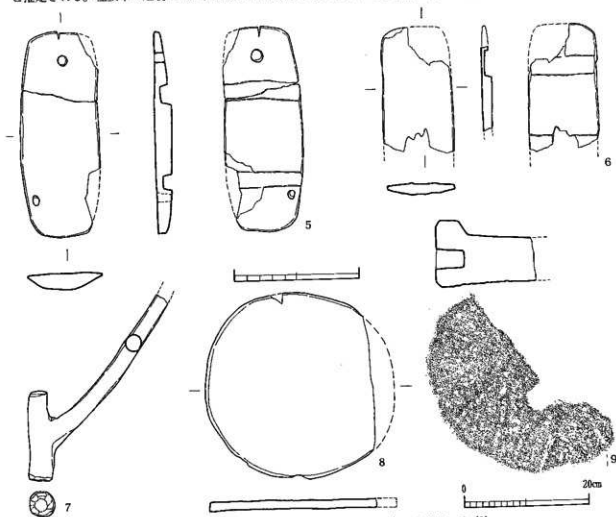


である。8は曲物の底板である。9は石臼の上臼で、花崗岩質の石材を使用している。第16図10・11は硯で、前者は砂岩質頁岩、後者は粘板岩が使用されている。なお、11は小型の携帯用の硯と推定され、最上層からの出土遺物である。12~16は砥石で、砂岩質の岩石が使用されている。いずれも置砥石であるが、16・17は特に大型で16は断面が方形、17は断面が七角形を呈する。

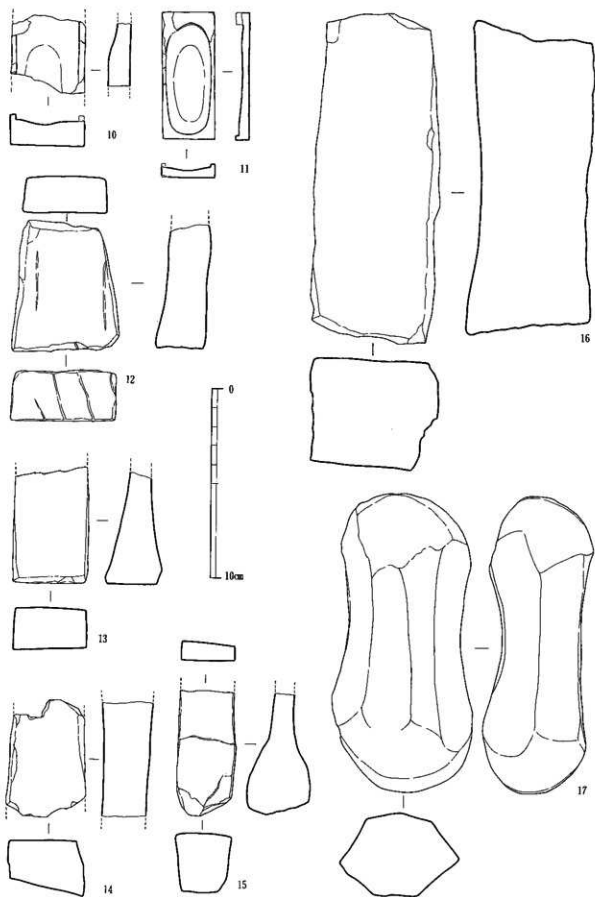
小結 1991年度の調査区では、古墳時代前期の土坑、中期の住居跡、中世の溝、近世の溝などが調査された。古墳時代前期の土坑SK1は壘形土器を用いた小児用の埋葬遺構で、七瀬川河川改修工事の調査区で検出された溝<sup>(1)</sup>と合わせて、周辺に当該時期の集落の存在を予測させる。古墳時代中期の住居跡SH1は、出土土器の構成に高環が大きな割合を占めることや須恵器の出土がないことから、5世紀前半から中頃に比定される。当該住居跡は面積が49.6㎡とかなり大型であり、ベッド状遺構を設けるなど、古墳時代中期のものとしてはやや特異な感を受ける。この時期の住居跡は床面積が30㎡以下で、ベッドなどの施設のない4本柱のものが普通である。当該時期の住居跡はやはり河川改修工事の調査区で数棟が検出されている<sup>(2)</sup>が、いずれもこのような施設・規模を有するものはない。今後は周辺の古墳時代中期の集落全体の中で、当該住居跡の性格がどのようなものであるのかの問題となろう。近世の溝SD1は水田の灌漑用水路であると推定される。埋土中の遺物には17世紀後半代に比定できるものがあり、溝の掘が当該



第25図 SD1出土遺物(5)  
(1,2はS=1/4,4は実大)

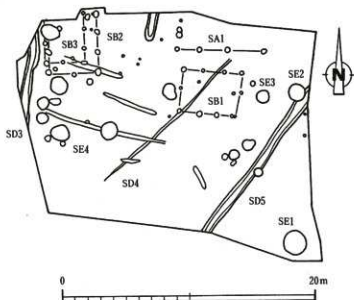


第26図 SD1出土遺物(5) (5~8はS=1/4, 9はS=1/8)



第27図 SD 1 出土遺物 ㊦

時期に遡る可能性がある。また、最上層から出土した遺物には幕末前後に比定されるものが多く、江戸時代の末期には溝が埋没している。穂田市遺跡が所在する大分県穂田地区は、現在も多くの水田が広がる景観を呈している。これらの水田を潤す水路には、地元で「古井路」と呼ばれる水路がある。伝承によると古井路は建久3年(1192)に掘削されたと伝えられるが、确实なところでは江戸時代の慶安5年(1652)に創設されたとされる。SD1は周辺の状況から判断すると、この「古井路」に取り付く支流の水路である可能性が高い。古井路の創建時期とSD1の存続時期には若干の齟齬をきたすが、SD1が井路に取り付く支流の水路であることを考えると、上記の時間的齟齬は矛盾をきたすものではないと考える。SD1が存在する地点は、発掘調査以前には小さな段差のある地形となっていた。このように、現在に残る微地形が古い時代の遺構のランド・マークとなっていることがあり、今後注意が必要であろう。



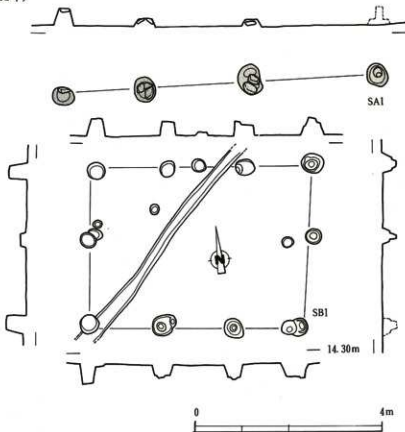
第28図 1992年度調査区 (S=1/300)

註1) 大分県教育委員会『穂田市遺跡Ⅳ』(1991年)

(2) 同上『穂田市遺跡Ⅴ』(1992年)

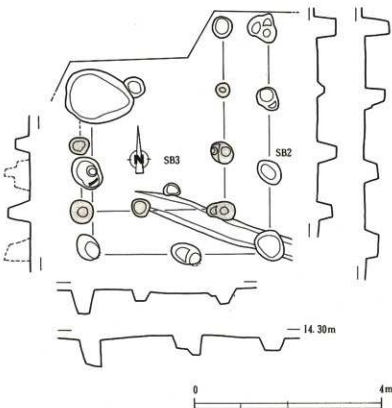
(2) 1992年度調査区 (第28図)

**概要** 1992年度調査区は、国道210号線バイパス建設に伴う穂田市遺跡の調査区のほぼ中央に位置する。調査当初は、七瀬川河川改修工事に伴う調査区との関連から穂田市遺跡P区と呼称していた。調査面積は約500㎡である。掘立柱建物3棟(SB1~3)、柵列(SA1)、土坑、井戸5(SE1~5)、溝3条(SD3~5)ほかを検出している。掘立柱建物や溝のうち、一部が中世に遡る可能性があるが、他の遺構はすべて近世以降に比定される。なお、井戸はすべてが近世以降に比定されることや掘り下げ時に地盤の崩壊の危険性が考えられたため、完掘していない。



第29図 SA1・SB1実測図 (S=1/80)

SA1・SB1～SB3 (第29・30図) SA1は柱穴4本からなる欄列で、全長6.8mを検出した。柱穴内部には、根締石と思われる礎数個を底面付近に配置しているものがある。SB1は東西3間、南北2間の掘立柱建物で、4.6m×3.2mの規模をもつ。この建物は時期不明の溝SD4と切り合い関係(SD4→SB1)にある。SB2・SB3も切り合い関係にある掘立柱建物(SB3→SB2)で、調査区北西隅付近で検出され、延長部はさらに調査区外に伸びる。SB2は東西2間、南北3間以上で、3.8m×4.7m以上の規模をもつ。SB3も東西2間、南北3間以上で、3.0m×3.9m以上の規模を有する。SA1・SB1～SB3からは出土遺物が認められず、詳細な時期は不明であるが、周囲の



第30図 SB2・SB3実測図(S=1/80)

状況からSB3が中世に遡る可能性が考えられるほかは、すべて近世以降の遺構である。

SD3～SD5 1992年度調査区からは3条の溝が検出されている。それぞれの規模と時期は以下のとおりである。

SD3 幅1.0m・延長7m・深さ0.3m。埋土中の出土遺物より、遺構の時期は江戸時代後期。

SD4 幅0.5m・延長14m・深さ0.2m。埋土中の出土遺物より、遺構の時期は18世紀後半以降。

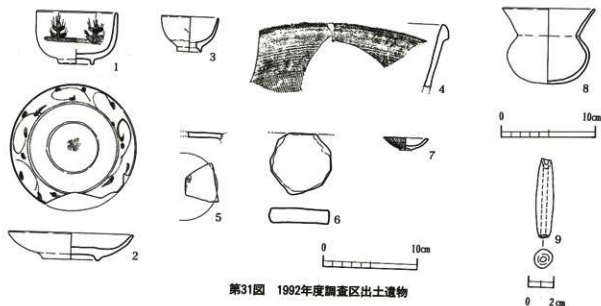
SD5 幅0.5m・延長14m・深さ0.3m。17世紀代に比定される井戸SEに切られていることから、江戸時代前期あるいは中世にさかのぼる可能性がある。

SE1～SE5・SK1～SK8 1992年度調査区からは5基の井戸または井戸と推定される遺構が検出されている(SE1～SE5)。これらはすべて近世に構築されたもので、掘り下げ時に地盤の崩壊の危険性が考えられたため、完掘していない。また、土坑は8基検出されており(SK1～SK8)、SK8が明治時代前半代に下るほかは、時期不詳のものも含めて、近世に構築されたものである。

出土遺物(第31図) 1992年度調査区からの出土遺物のうち、図示可能なものを紹介する。第31図1はSD4出土の肥前磁器染付碗である。外面に松樹文を描く。18世紀後半代に比定される。2もSD4出土の肥前磁器染付皿である。内面の五弁花文はコンニャク印判によるもので、見込みは蛇ノ目軸剥ぎとなる。18世紀後半代の製品。3・4はSK1とSE1から出土した破片が、それぞれ接合している。3は肥前磁器染付碗で、外底部付近が露胎となる。外面に一部染付文様が認められるが、欠損のため文様の全体像は不明である。18世紀後半代に比定される。4は肥前陶器鉢で、18世紀後半以降の製品である。5はSE1出土の肥前磁器染付皿の底部破片である。内定部に朱書きの焼継文字を有するが、欠損のため、判読できない。染付による銘款も欠損が大きいが、一重方形枠を有する渦溝である可能性が高い。見込みは蛇ノ目軸剥ぎである。18世紀後半以降に比定される。

遺構名	調査時の遺構名称	時期を判別できる出土遺物（小破片を含む）	遺構の時期
SA1	P区柱穴列	—	近世
SB1	P区1号掘立	—	近世
SB2	P区2号掘立	—	近世
SB3	P区3号掘立	—	中世?～近世
SD3	P区溝4	関西系陶器?	18C後半以降
SD4	P区溝3	肥前磁器染付碗・皿（第31図1・2） 肥前磁器蛇ノ目軸刺碗（18C後半）	18C後半
SD5	P区溝1	—	中世?
SE1	P区井戸1	肥前磁器染付碗（第31図3）・肥前磁器搦鉢（同4） 肥前京焼風陶器兵器手碗（17C後半） 二彩手唐津陶器鉢（17C末～18C前半） 肥前磁器二重網目文染付碗（18C後半） 肥前磁器染付端反碗（1820～1860年代）	19C前半～中頃
SE2	P区井戸2	関西系陶器底部（18C後半以降） 唐津系陶器皿口縁（17C前半）	17C代
SE3	P区井戸3	肥前京焼風陶器兵器手碗（17C後半） 肥前京焼風陶器兵器手碗（17C後半）	17C後半代に遡る可能性あり。 不明
SE4	P区井戸4	—	不明
SE5	P区井戸5	—	不明
SK1	P区土坑1	肥前磁器鉄軸灰軸掛け分け碗（1630～1650年代） 肥前磁器染付碗（第31図3）・肥前陶器搦鉢（同4） 二彩手唐津陶器鉢（17C末～18C前半）	19C前半～中頃
SK2	P区土坑2	—	不明
SK3	P区土坑3	—	不明
SK4	P区土坑4	—	不明
SK5	P区土坑5	瓦加工品（第31図6）・肥前白磁缸皿（同7） 二彩手唐津陶器鉢（17C末～18C前半） 瀬戸美濃陶器缸皿（19C前半）	19C前半以降
SK6	P区土坑6	—	不明
SK7	P区土坑7	—	不明
SK8	P区土坑内8	クロム青磁碗（明治前半）	明治前半

第3表 1992年度調査区遺構一覽



第31図 1992年度調査区出土遺物

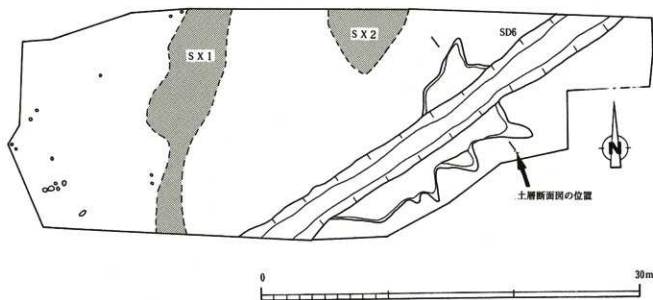
6・7はSK5の出土品である。6は瓦片の再加工品で、平瓦の破片を円盤状に再加工している。製品の端部には側面の一部が残存している。詳細な年代は確定できないが、江戸時代後期のものであろう。7は肥前磁器白磁紅皿で、18世紀後半以降の製品である。8は調査区排土中から出土した土師器小型丸底壺である。4世紀代に比定できよう。9も排土中から出土した土師で、詳細な年代は確定できないが、江戸時代後期のものである可能性が高い。

**小結** 1992年度調査区から検出された遺構の大半は、江戸時代後期に比定されるものである。掘立柱建物・楯列・井戸・土坑などで構成される遺構群は、近世農民の居住地の一部である可能性が高い。周辺からは水田耕作に使用されたと推定される用水路（1991年度調査区のSD1や七瀬川河川改修の調査区でも多数の溝が検出されている）が検出されており、これらの遺構と一体となって、近世後期の農村の集落景観を形成していたものと推定される。また、本調査区からは近世以前の明確な遺構は検出されていないが、排土中から土師器小型丸底壺などが出土しており、他の地区と同様に、本来は古墳時代に比定される何らかの遺構が存在していた可能性が高いと考えられる。

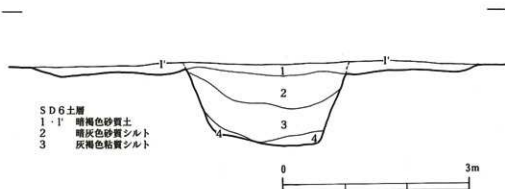
### (3) 1990年度調査区 (第32図)

**概要** 1990年度調査区は、国道210号線バイパス建設に伴う穂田市遺跡の調査区の東側に位置する。発掘調査当初は、七瀬川河川改修工事に伴う調査区との関連から穂田市遺跡O区と呼称していた。調査面積は約1,600㎡である。11～12世紀代に比定される溝1(SD1)と弥生時代終末から古墳時代前期の遺物包含層(SX1・SX2)が検出されている。

**SD6 (第33図)** 調査区東側を斜めに縦断する形で検出された溝である。幅2.4m、長さ30m、深さ1.2mを測り、延長部はさらに調査区外に延びる。埋土は4層に分層され、最下層の粘質土には細かい砂粒が認められる部分があり、流水の痕跡を示している。埋土中からの出土遺物の大半は古墳時代の土器の小片であるが、これらはすべて周辺からの流れ込みであり、遺構の時期を示唆するものではない。埋土中からの出土遺物には、糸切り痕の認められる土師器や中国産の白磁片が少量認められ、これらがSD1と関係する遺物である可能性が高い。遺構の時期を示唆する遺物が少量であるため、詳細な年代を確定できないが、SD1の時期は11～12世紀代に比定される可能性が高い。



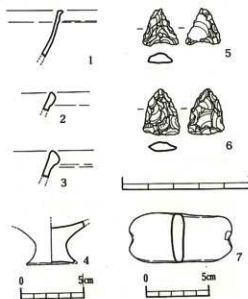
第32図 1990年度調査区 (S=1/300)



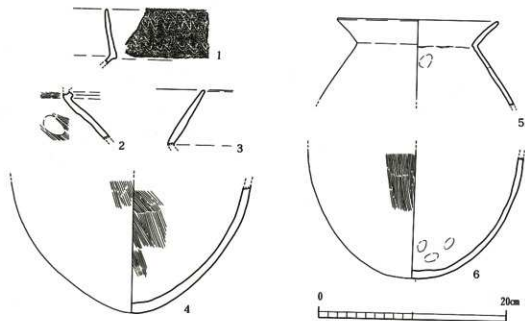
SD6土層  
 1 暗褐色砂質土  
 2 暗灰色砂質シルト  
 3 灰褐色粘質シルト

第33図 SD6土層断面図 (S=1/60)

出土遺物 (第34図) 第34図に示したものは、すべてSD1の埋土中からの出土遺物である。1～3は中国産白磁の口縁部片である。1は口縁部を外反させ、端部を水平にする形態、2・3は小型の玉縁口縁を呈する。4は土師器で、小破片のため、器形や傾きなどについて、さらに検討が必要であるが、台付皿に復元される可能性が高いと考えるものである。磨滅により、非常に不鮮明であるが、底部にはわずかに糸切りの痕跡が認められる。以上、1～4がSD1の時期を示唆する遺物と推定される。5・6は石鏃で、5は姫島産黒耀石、6はサヌカイトを素材としている。7は石鏃で、砂岩質頁岩が使用されている。



第34図 SD6出土遺物

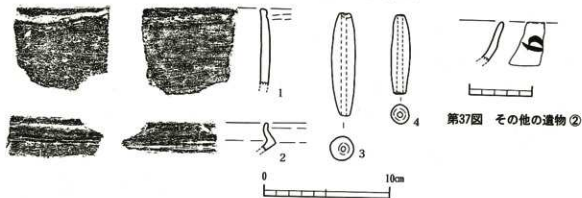


第35図 SX1・SX2出土遺物 (S=1/4)

SX1・SX2 調査区内に弥生時代後期末から古墳時代前期の土器を包含する茶褐色の遺物包含層が存在する。便宜上、西側の包含層をSX1、東側の包含層をSX2と呼称することにする。土器の遺存状況は比較的良好であり、ややまとまった出土状態を呈するものもあったが、周辺に土坑や住居跡などの遺構が存在した形跡は認められなかった。

出土遺物(第35図) 1～4はSX1の出土遺物である。1は在地系の複合口縁壺の破片で、発達した複合口縁の外面に脱化した櫛描き波状文を施している。2は複合口縁壺の頸部破片で、3は単口縁壺の口縁部破片である。4は壺の胴部下半から底部にかけての破片である。1～4は、いずれも弥生時代後期末から古墳時代前期の所産である。5・6はSX2の出土遺物で、同一個体の壺である可能性が高い。底部内面付近に指頭痕が認められる。古墳時代前期の布留式併行期に比定される。

その他の遺物(第36・37図) 1990年度調査区内において、遺構検出中に出土した、その他の出土遺物を紹介する。第36図1は縄文時代晩期の深鉢、2は浅鉢の口縁部破片である。いずれも、その器形の特徴から、刻見目突帯文土器単純期である下黒野式の時期に比定されよう。3・4は土錵で、詳細な時期の比定は不可能である。5は土師器塊の口縁部と思われる。外面には墨書による文字の一部が認められるが、欠損のため、判読できない。小破片のため、時期の決定が困難であるが、中世に比定できるものであろうか。



第36図 その他の遺物①

第37図 その他の遺物②



**小結** 本調査区の中で、最も注目すべき遺構はSD1である。調査区の制限により、SD1の調査区外への展開は不明であるが、本調査区の南側約70mに位置する七瀬川河川改修調査区では当該遺構に対応する溝は検出されていない。SD1の時期については、少量の出土遺物から判断すると、龍泉系青磁が盛行する以前で、中国産白磁のみが主体的に存在する11～12世紀代に比定しておくのが妥当なところと考えられる。穂田市遺跡において発掘調査の行われた国道210号線バイパス調査区および七瀬川河川改修調査区では、当該時期に比定される遺構はSD1が唯一のものである。ただ、本遺構と同様の時期や規模に匹敵する溝が、本調査区の西側約450mに位置するガランジ遺跡(本書収録)でも2条検出されており、注目される。穂田市遺跡とガランジ遺跡は、中世には「穂田荘」と呼ばれる荘園に含まれていたとみられる。「穂田荘」の初見は保元2年(1157)、保元の乱で戦死した藤原頼長の没官領中にみられ(『兵範記』)、このころすでに摂関家領となっていたと思われる。穂田荘の詳細な成立年代や成立事情は不明ではあるが、本報告のSD1やガランジ遺跡の溝が穂田荘の成立やその整備に関わる遺構であるとするれば大変興味深い。

また、包含層や遺構外からは弥生時代後期末から古墳時代前期や縄文時代晩期末の土器が出土した。これらは断片的な資料ではあるが、本調査区周辺で検出された遺構・遺物と同時期のものであり、各時期の生活面の広がりや把握する上で重要な資料となった。

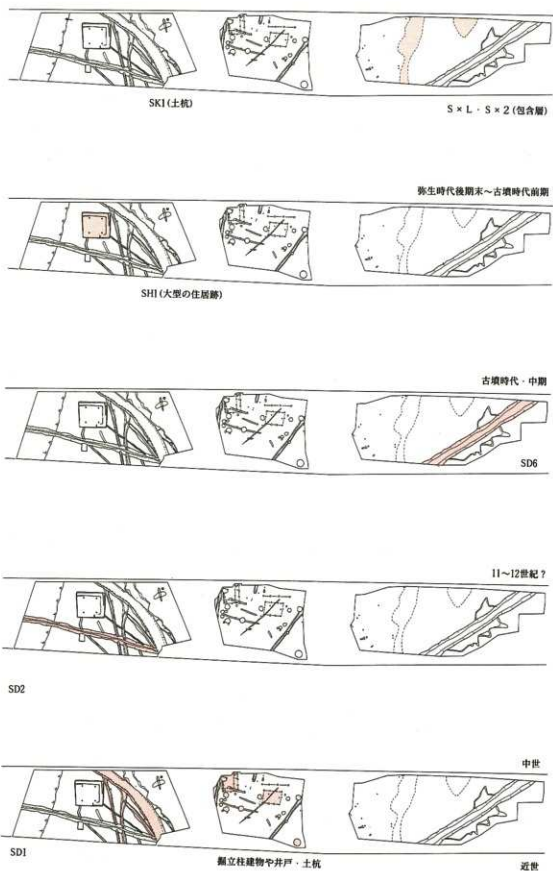
### 3. まとめ

本書では、国道210号線バイパス建設に伴う穂田市遺跡の調査概要を報告した。穂田市遺跡の全体像はなお不明な部分が多いが、国道バイパスの調査と並行あるいは先行して、七瀬川河川改修工事に伴う発掘調査も行われており、現時点では両調査区の調査成果を合わせて検討するのが理想的である。従って、以下では国道210号線バイパスと七瀬川河川改修工区の調査区で検出された遺構を時期別に紹介して、まとめに代えたい。(第38～42図参照)。

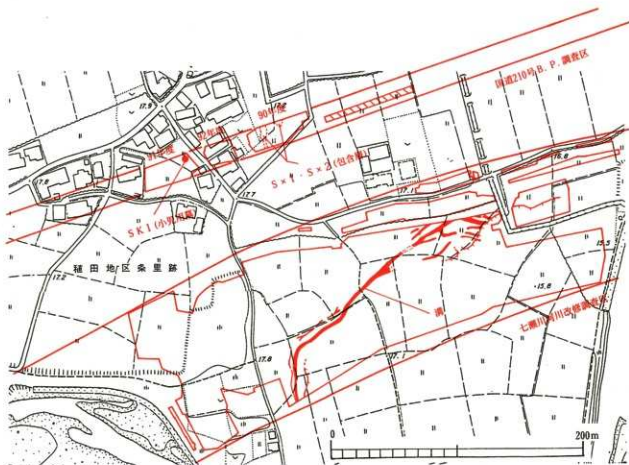
**縄文時代晩期末** 研究者によっては「弥生時代早期」と呼称されることもある時期で、考古遺物としては刻目突帯文土器を指標とする。穂田市遺跡周辺には当該時期の遺物包含層が分布しており、特に河川改修調査区では埋壘や多量の土器などが検出されている。国道バイパス調査区では1990年度調査区で少量の土器類が採取されているにすぎない。(第36図1・2)。未だ確証を得ていないとはいえ、穂田市遺跡の立地とこのような遺物の分布状況は、当該時期に水稻稲作の開始を示唆している可能背が考えられる。今後の調査でさらに検討が進められることが期待される。

**弥生時代後期末～古墳時代前期** (第38図1・第39図) 弥生時代後期末～古墳時代前期になると、河川改修調査区に灌漑用と推定される比較的大規模な溝が掘削される。この溝は弥生時代後期末に掘削が開始され、古墳時代前期に再び掘り直されている。この溝の周囲には、明確な遺構としては確認できていないものの、水田が営まれていたと推定される。国道バイパス調査区では、1991年度調査区で小児用の埋葬遺構と推定される土坑、および1990年度調査区で当該時期の包含層が検出されている。従って、河川改修調査区は当該時期の生産面、国道バイパス調査区は当該時期の集落域の一部であった。ただし、国道バイパス調査区では堅穴住居跡が検出されてなく、この地点は集落の周辺部であった可能性が高い。

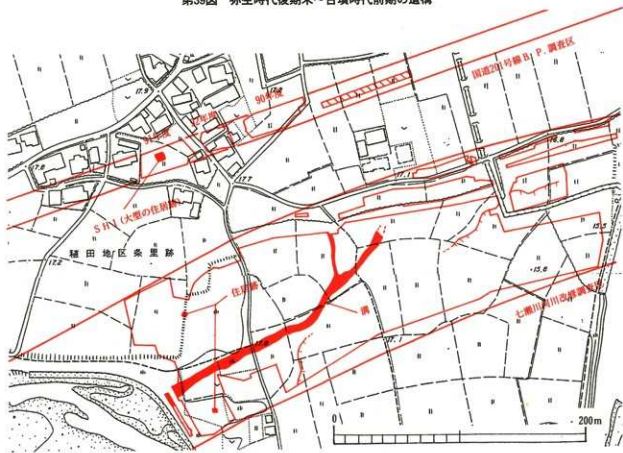
**古墳時代中期** (第38図2・第40図) この時期には、河川改修調査区で古墳時代前期とほぼ同じ位置に新しい溝が掘削され、溝の南西側には数基の堅穴住居跡が営まれる。国道バイパス調査区ではベット状遺構を有する大型の住居跡が検出されている。この住居跡は河川改修調査区内の住居跡よりはるかに大型であり、しかもその周辺には他に住居跡が営まれている様子はなく、当該遺構だけが孤立して運営されている印象を受ける。住居跡から出土した土器は土師器高環が主体を占め、須恵器が検出されていないことから、その実年代は5世紀中頃前



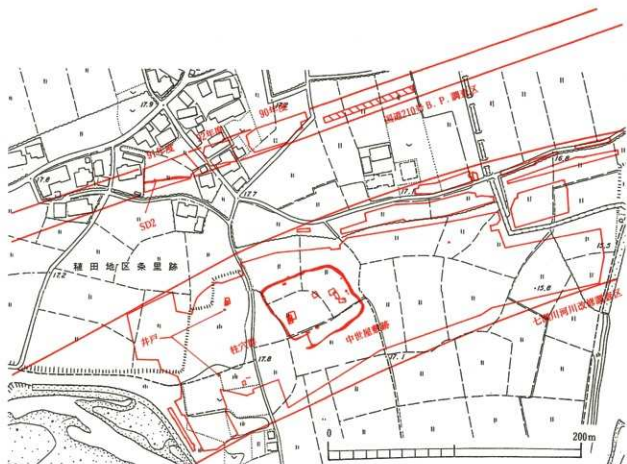
第38図 国道210号線バイパス建設に伴う穂田市遺跡の時期別遺構 (S=1/1000)



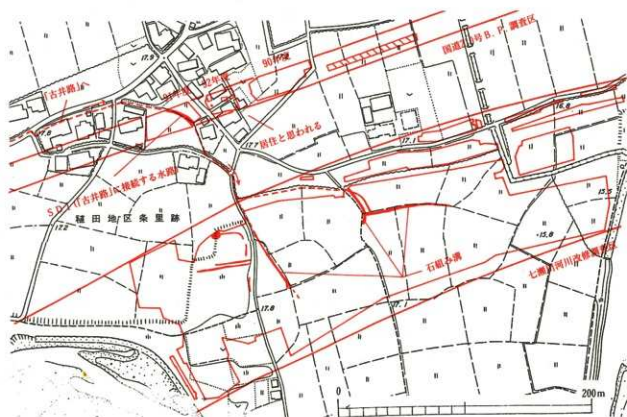
第39図 弥生時代後期末～古墳時代前期の遺構



第40図 古墳時代中期の遺構



第41図 中世の遺構



第42図 近世の遺構

後と推定される。この状況は5世紀中頃前後の穂田市遺跡の集落の中で、国道バイパス調査区で検出された住居跡(SH1)が集落跡の中でも主体的な位置を占めるものであることが推定される。ただ、このような状況も5世紀末前後になると、河川改修調査区でカマドを有する住居跡が多数造営されるようになり、集落の主体は河川改修調査区の方に移動したと思われる。

11～12世紀(第38図) 国道バイパス調査区で1条の溝(SD2)ほかを検出されている。この溝は河川改修調査区で検出された溝で囲まれる屋敷を中心とする中世後半期の集落とほぼ同時期に比定される。いずれにしても、当該時期の中心部は河川改修調査区の方であったと推定される。

中世(第38図4・第34図) 国道バイパス調査区で溝1条(SD2)ほかを検出されている。この溝は河川改修調査区で検出された溝で囲まれる屋敷を中心とする中世半期の集落とほぼ同時期に比定される。いずれにしても当該時期の中心部は河川改修調査区の方であったと推定される。

近世(第38図5・第42図) 国道バイパス1991年度調査区で検出された溝SD11は、慶安5年(1652)に改修されたとされる「古井路」に接続する灌漑用の水路である。河川改修調査区では、さらにこのSD1に接続すると推定される水路も検出されている。また、国道バイパス1992年度調査区では近世の集落(農村)と思われる掘立柱建物や溝・土坑、井戸などが検出されている。特に井戸は5基が検出されており、当該調査地点周辺が近世の集落の主体であったことが推定されよう。

## 第6章 植田条里遺跡の調査

### 1. 調査概要

#### 1) 調査区の設定

植田条里遺跡と呼称されるのは、広大な面積を占める。その中を国道210号バイパスが横断する形になり、長さが2°にも及ぶ。そこで、現在の水田区画などをもとにして第43、44図のようにAからHの8地区に分け、順次調査を行うことにした。

#### 2) 調査の概要

植田条里遺跡と呼ばれるものは、当然ながら地表面で確認できる「条里」痕跡の広がる地域を指している。今回の調査は、当初から「条里」を念頭に置いたものでなかったため、意識的な調査ができなかった憾みはあるが、平野部に細長いトレンチを設定したことにより、平野部全体のおおよその遺跡の状況がつかめるようになった。

調査はまず遺構の確認のために試掘調査からおこなった。基本的には重機による表土剥ぎで、住居跡などの遺構確認を行った。さらに、水田の存在が考えられる地区についてはさらに掘り下げを行い、水田面の確認を行った。

試掘調査の結果、B、D、E、F、Hの5地区において遺構、遺物が確認された。以下、遺構と遺物に分けて調査結果を記述する。



第43図 調査区位置図 (その1)



2. 遺構と遺物

B区

溝が3条確認されたのみで、他の遺構は検出されなかった。また、他地区で検出した古墳時代の水田層の確認はできなかった。しかし、土層観察によると少なくとも6層程度の水田耕作土が認められ、後述する近世の溝検出面より下で少なくとも2層の耕作土があることから、近世以前の水田が存在した可能性もある。

(溝1)

調査区の北東側で検出された東西方向に伸びる溝である。幅は0.8mから1.2m、深さは20cmから30cm程度である。溝内部には杭の痕跡が多数認められ、また多くの礫とともに陶磁器が出土した。また、溝埋土には砂層が認められ、水路として利用されたことがわかる。底面は東に向かって僅かに低下しているため、水の流れるのは西から東である。

出土遺物は第46図1～12で、1点の中世白磁(1)を除くとすべて近世の陶磁器である。

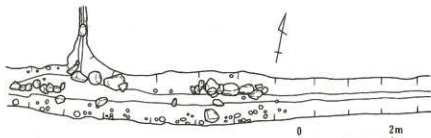
(溝2、3)

溝2と溝3は溝1に対して直行する形で検出された。溝2は幅0.4mから1m、深さ10cm程度、溝3は幅0.6mから1.2mで深さは15cm程度である。

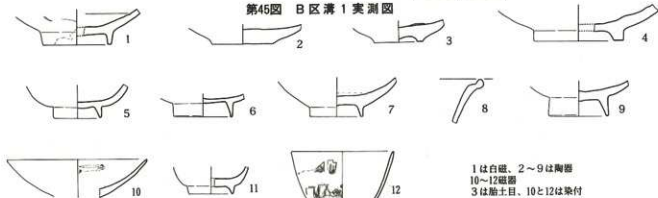
出土遺物は少なく、時期は不明である。



第44図 調査区位置図(その2)

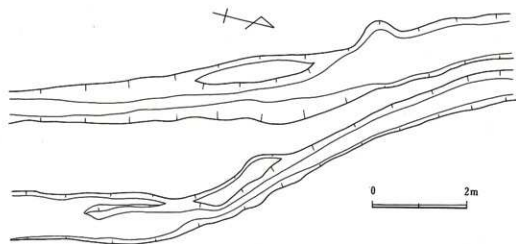


第45図 B区溝1実測図



第46図 B区溝1出土遺物

1は白磁、2～9は陶器  
10～12磁器  
3は胎土目、10と12は染付



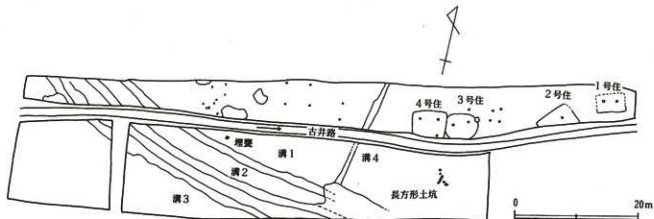
第47図 B区溝2、3実測図

**D区**

D区では中央部を現水路（古井路）が西から東に向かって流れており、調査は北調査区と南調査区に別れる。調査区内では、溝1から5と4基の住居跡、埋篋1基が検出された。

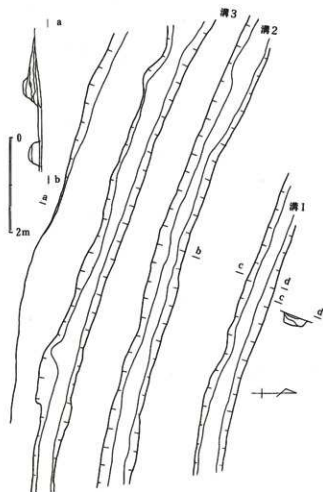
**（土層）**

調査区の南壁の土層（土層A）を調査した。それによると後述する古墳時代前期の溝1、3、4の検出面は砂質の明灰褐色土中に認められ、それより上位では水田耕作土が認められた。この水田耕作土は古墳時代前期の溝埋没後、間層があってその後形成されている。耕作土中からは古墳時代後期の須恵器が出土しており、他地区で確認された古墳時代後期の水田と考えられる。



第48図 D区 遺構配置図





第49図 溝1、2、3実測図

(溝1、2、3)

溝1、2、3は並行しており、緩やかに円弧を描くように北西から南東に向かって伸びている。溝1は1.2m、深さは35cmから60cmで、土層断面図からわかるように灰褐色粘質土が下層に堆積し、滞水していた状況を示している。明確な砂層はなかった。

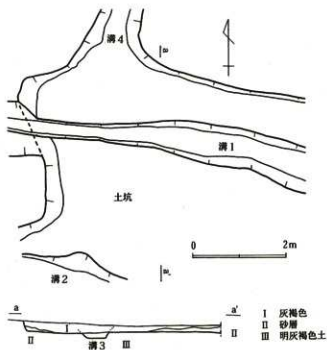
溝2は幅1.5m、深さ50cm程度である。溝1と同様に最下層には粘質の灰褐色土が堆積していた。

溝3は、南側の上端が外側に広がり、幅3m程度と幅広いが、掘り下げの始まる部分からであると、幅約1m程度になる。深さは50cmから60cmである。堆積状況は、最下層に粘質の灰褐色土で、上層には砂層も認められる。

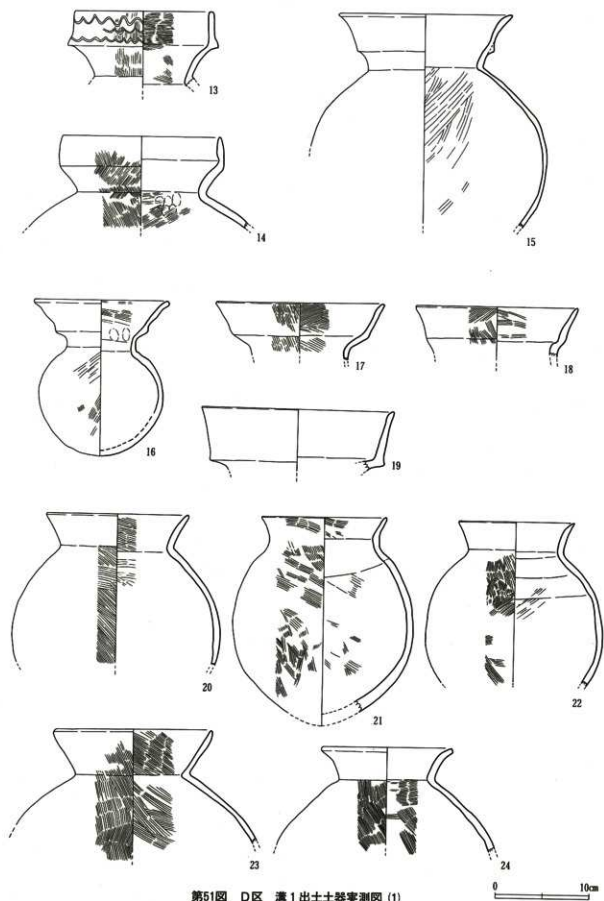
出土遺物は、特に溝1において溝最上層の暗灰褐色土中から廃棄された状態で大量に出土している。13から144は溝1、145から169は溝の出土である。

(溝4)

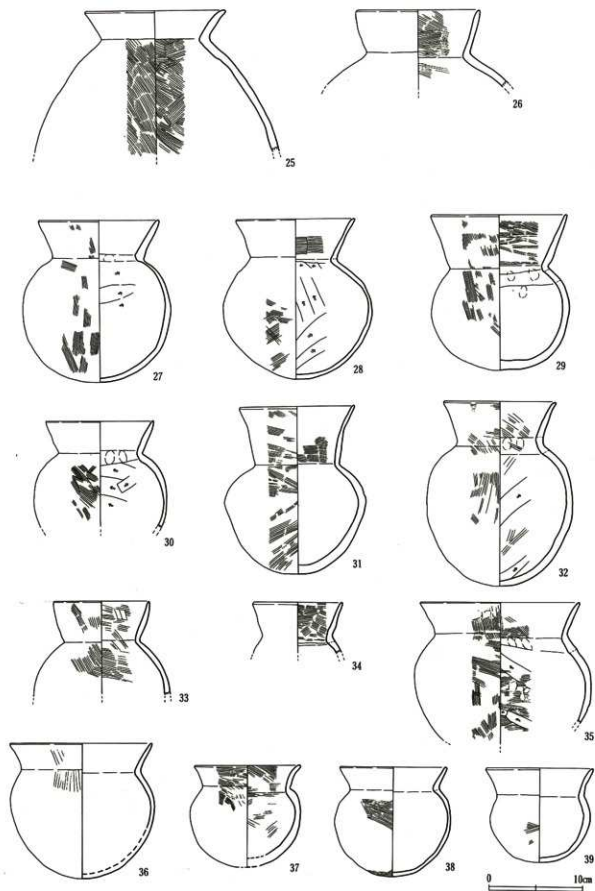
溝1から3に直行する形で略南北方向に伸びる溝。幅約0.7mで、深さは30cmから40cmである。溝1を切っており、溝2との平面の観察では、後述の長方形土坑が重なっているために切り合い関



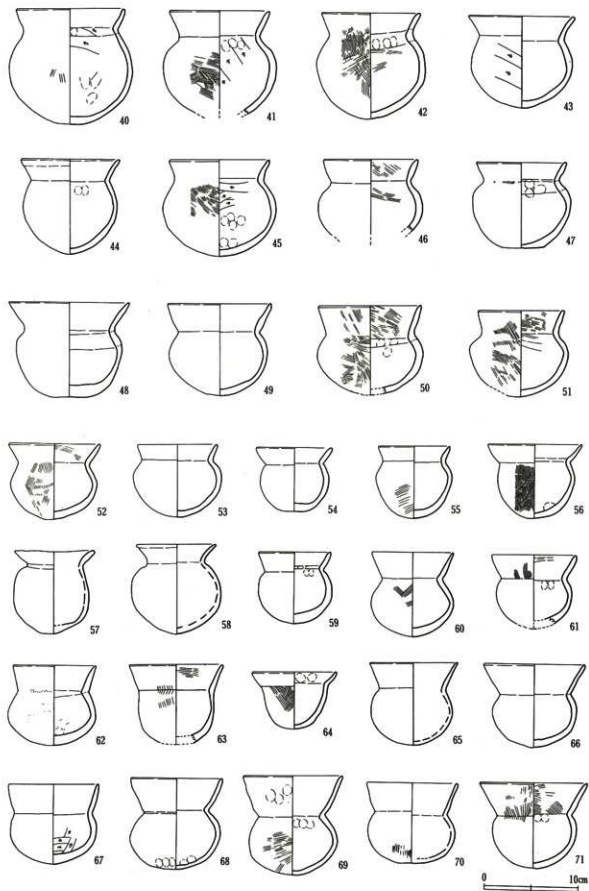
第50図 D区溝4と長方形土坑実測図



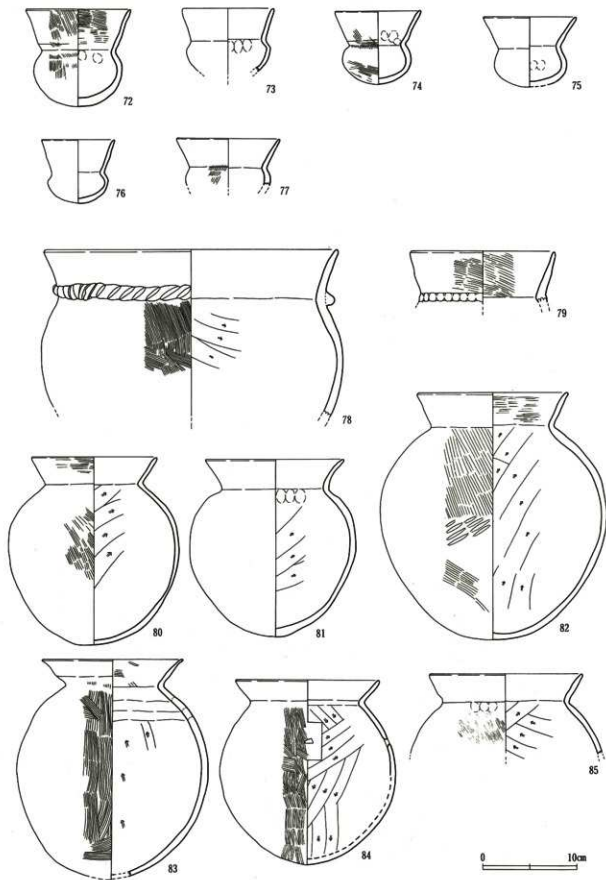
第51図 D区 溝1出土土器実測図(1)



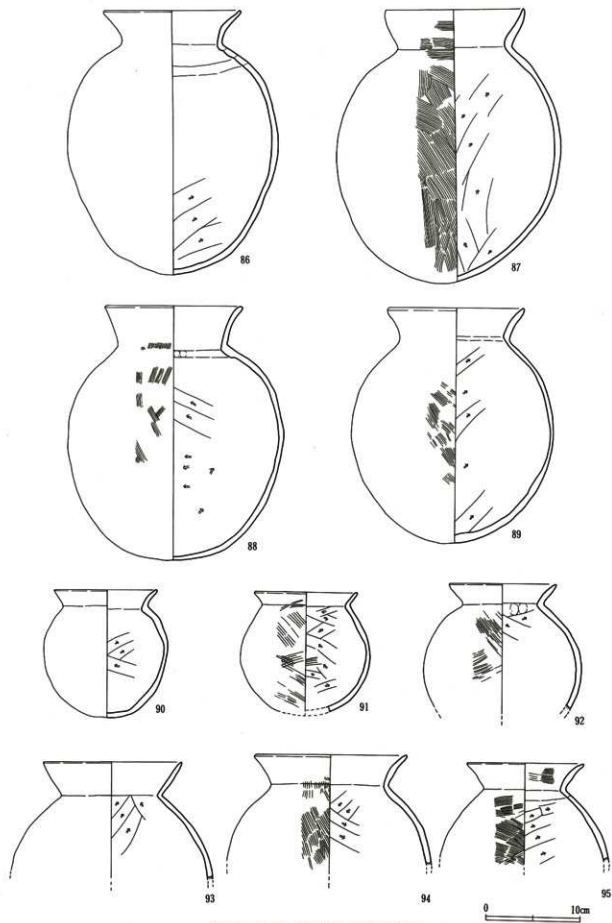
第52図 D区 溝1出土土器実測図(2)



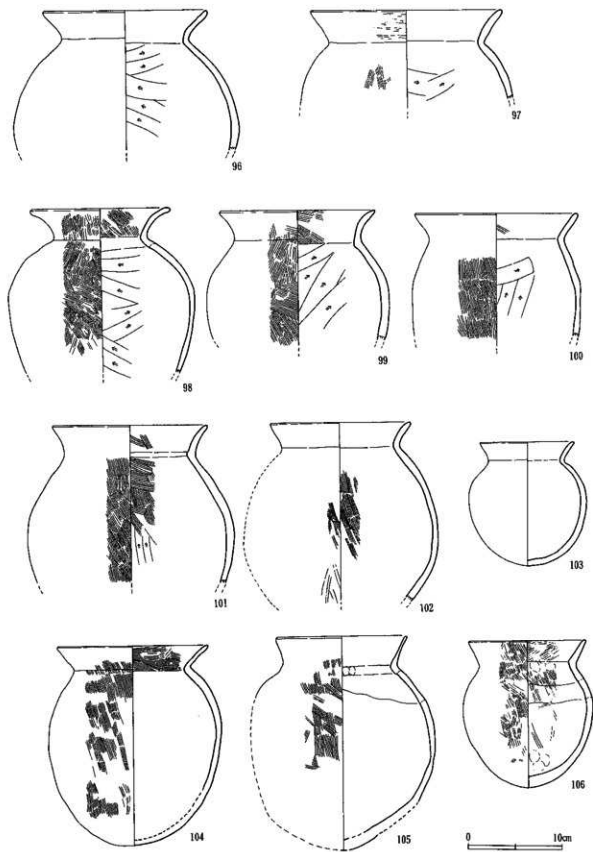
第53図 D区 溝1出土土器実測図(3)



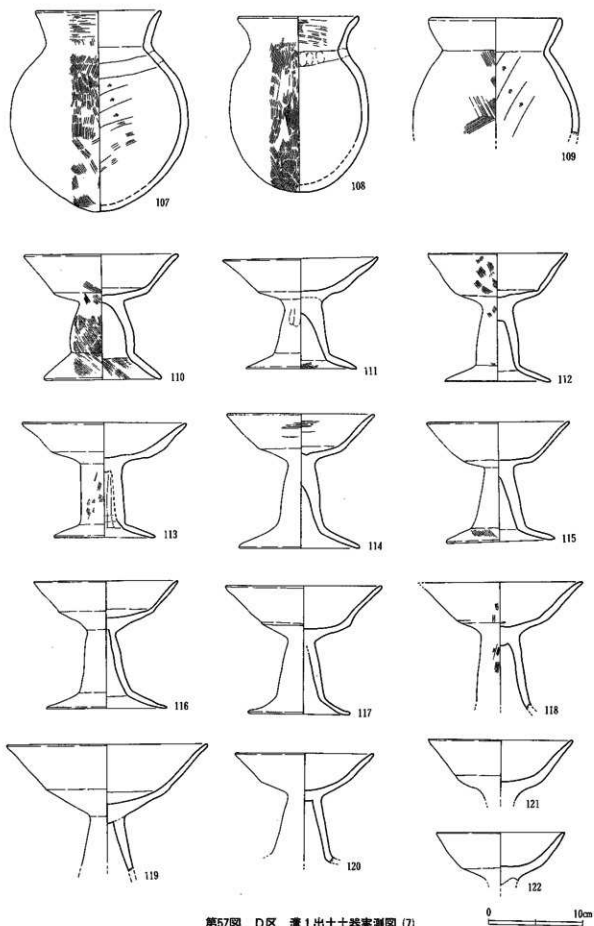
第54図 D区 溝1出土土器実測図(4)



第55図 D区 溝1出土土器実測図(5)

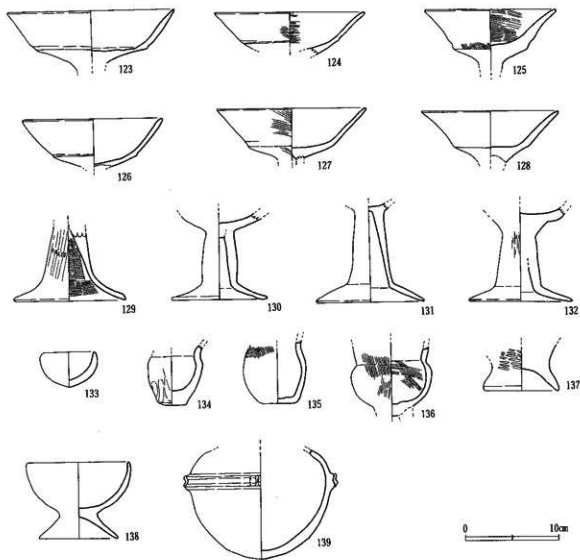


第56図 D区 溝1出土土器実測図(6)

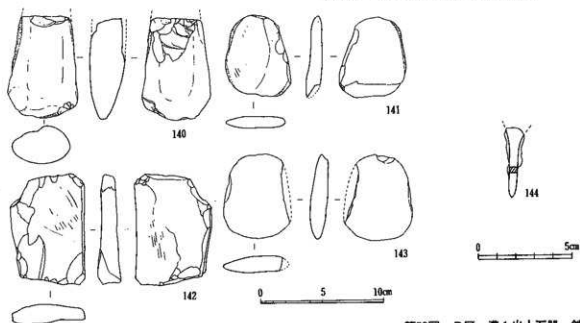


第57図 D区 溝1出土土器実測図(7)

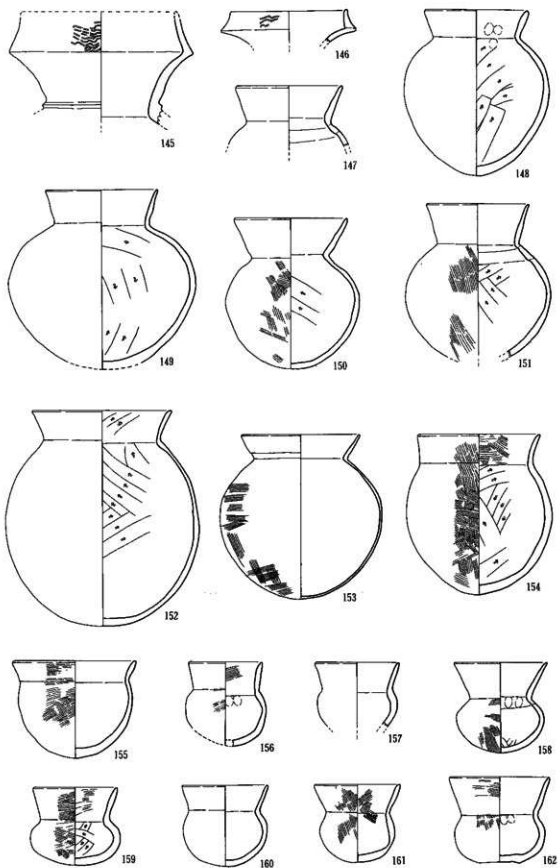




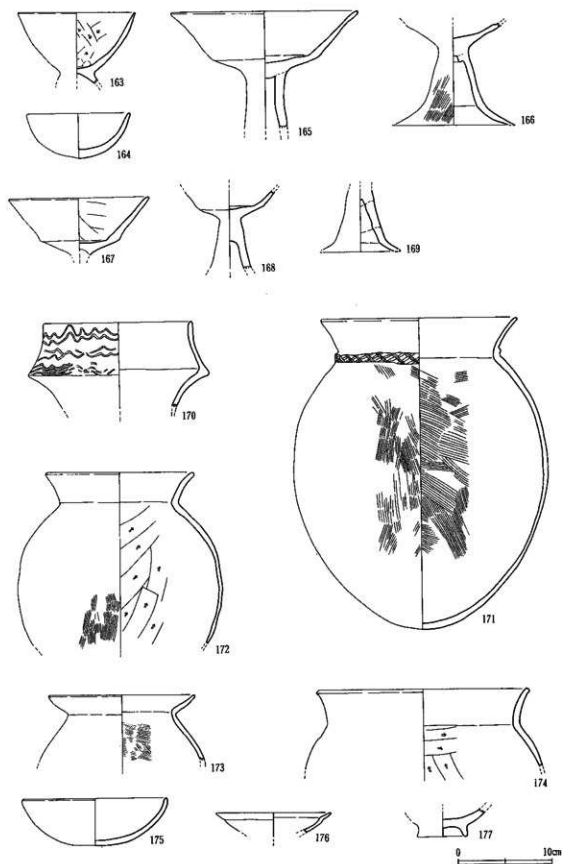
第58図 D区 溝1出土土器実測図(8)



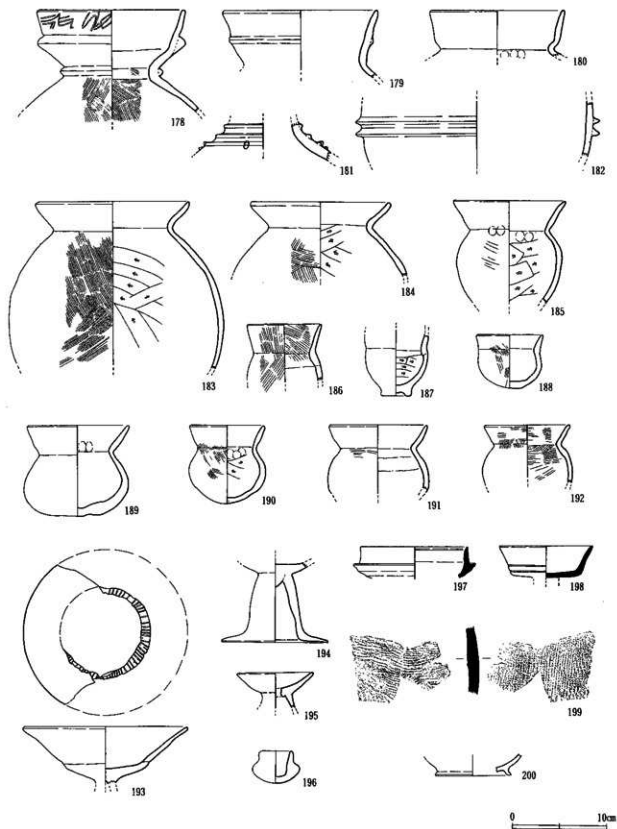
第59図 D区 溝1出土石器、鉄器



第60図 D区溝2、4出土土器実測図(1)



第61図 D区溝2、4出土土器実測図(2)



第62図 D区長方形土坑出土土器実測図

係は不明である。しかし、土層を観察すると、当然確認できるはずの位置に溝4は確認できないので、溝2につながっていた可能性が高い。

出土遺物は170から177で、溝1から3のもの比べて時期に差は認められない。177は高台付の土師器で、混入物と考えられる。

(長方形土坑)

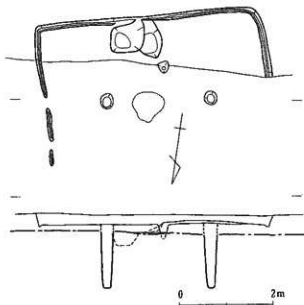
溝1、溝2を切る遺構であるが、溝4との切り合い関係は確認できなかった。また、調査区外に伸びるため、全形が確認できない。深さは15<sup>cm</sup>程度と浅い。

出土遺物は第62図で、178から196は古墳時代前期、197から199は6世紀の須恵器、200は高台を持つ土師器碗で古代まで下る。200は後世の攪乱による混入と考えられる。

(第1号住居跡)

検出された4基の住居跡の中で、最も東側に位置する。北側の3分の1程は後世の削平を受けており、僅かに一部分の壁溝が残っているに過ぎない。南北3.0m、東西は4.9mの長方形に復元できる。最も残存している部分で、深さは10<sup>cm</sup>程度に過ぎない。主柱穴は2本で、その間に地焼炉がある。壁溝は全周していたと考えられる。また、南側の壁際には切り合いの認められる土坑が2つある。一般的な貯蔵穴と考えられる。

出土遺物は201と202である。



第63図 D区第1号住居跡実測図

(第2号住居跡)

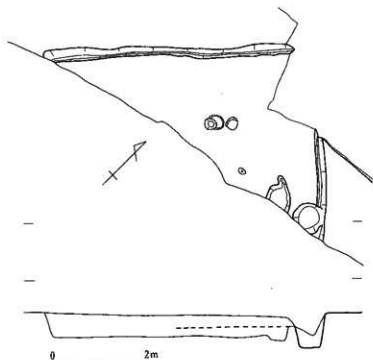
1号住居跡の西側にある住居跡で、大半は「古井路」によって壊されている。コーナー部分も後世の削平で壊されており全形は不明であるが、コーナーの明確な方形(長方形)になると考えられる。深さは約25<sup>cm</sup>である。主柱穴は1か所のみ検出できたが、位置関係から通例の4本であろう。壁溝が巡る。

出土遺物は203から213である。212は石皿、213は磨石である。

(第3号住居跡)

4号住居跡に西側の一部を切られる。平面プランは楕円形で、長軸5.5m、短軸4.3mに復元できる。残存する深さは約5m程である。中央部に地焼炉があり、南側壁際にはごく浅い皿状の土坑がある。主柱穴は2本確認されたが、やや北側に寄っている。壁溝は確認できなかった。

出土遺物は214から218である。

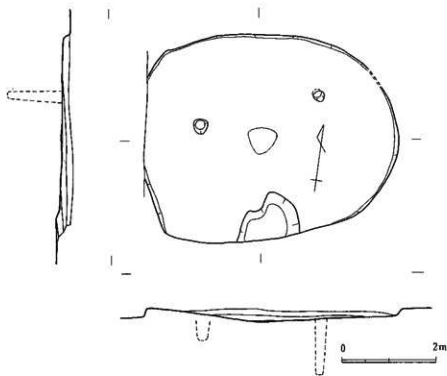


第64図 D区第2号住居跡実測図

(第4号住居跡)

最も西側で検出された住居跡で、3号住居跡を切っている。南側は「古井路」により破壊されており全形は不明であるが、一辺約5.6mの方形に復元できる。残存する深さは10mほどである。主柱穴は3カ所確認できたが、調査区外に1本が想定できるため、4本主柱となる。炉、壁溝、土坑などは認められなかった。

出土遺物は細片のみで図示できるものはない。

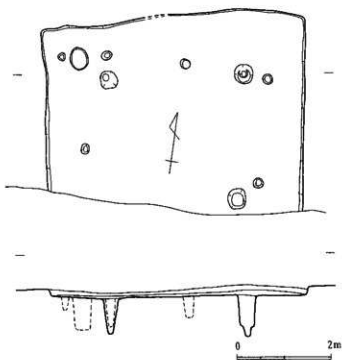


第65図 D区第3号住居跡実測図

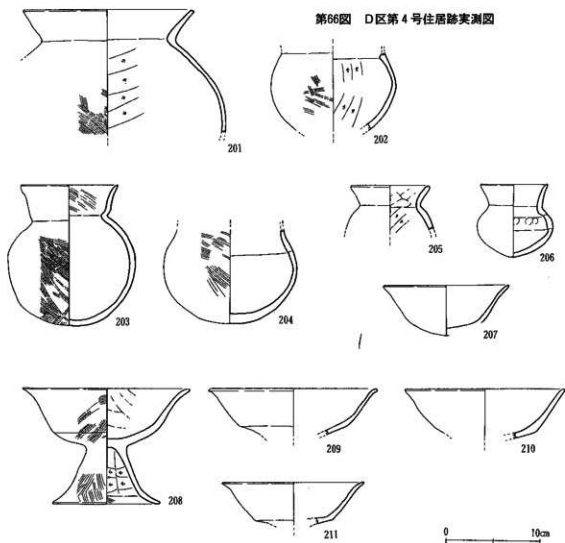
(その他の出土遺物)

219は第48図の「埋壘」の地点から出土したもので、口縁部を下向きにして倒立して埋められていた。下城式の壘である。

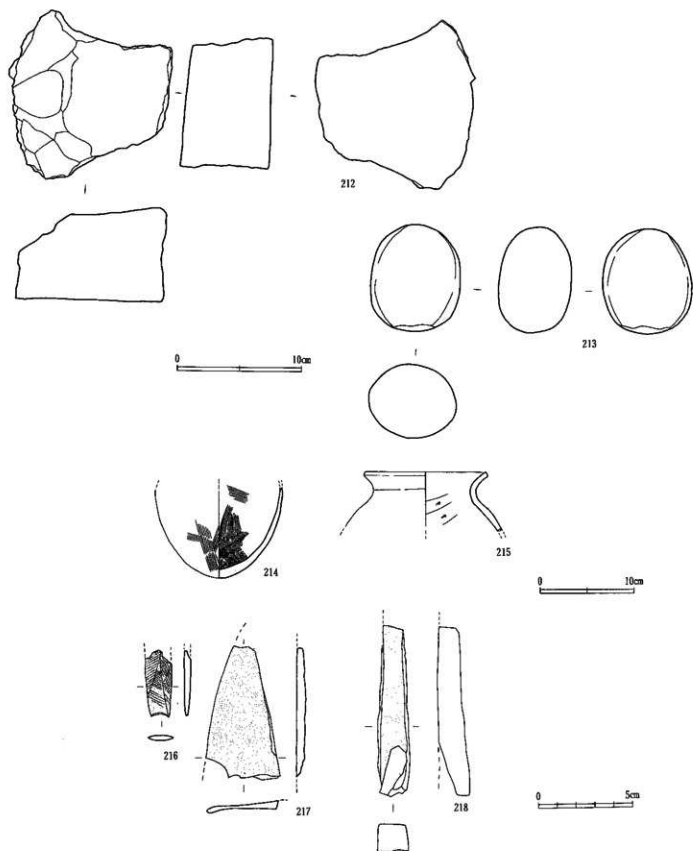
222は水田層から出土したものである。



第66図 D区第4号住居跡実測図

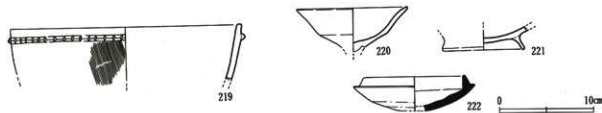


第67図 D区住居跡出土遺物実測図(1)



第68図 D区住居跡出土遺物実測図(2)





第69図 D区出土土器

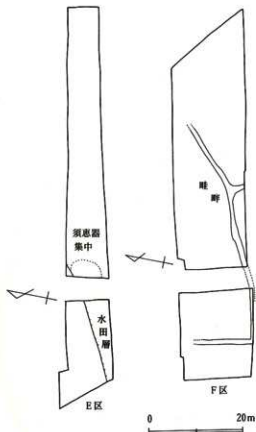
E区

E区はほぼ全面に水田層が広がっていた。僅かにE-II区において水田層の境界が認められた。出土遺物は古墳時代後期のものであり、水田層も古墳時代後期と考えられる。

水田耕作土中より223~233の土器が出土している。

F区

畦畔をとまなう水田遺構が検出された。その畦畔で大きく区切られた水田面は4面あるが、いずれも調査区内で完結せず面積は不明である。耕作土の上面には砂層はなく、小畦畔はすでに削平されている可能性が高い。検出された畦畔は、土層断面図からわかる通り、耕作土下の土層の掘り残しである可能性が高い。すなわち、耕作土を寄せ集めて盛り上げた小畦畔ではなく、当初から計画的に設定された大区画を示す畦畔であったと考えられる。その畦畔で区画された水田面は4面となる。



第70図 E、F区遺構配置図

(土層)

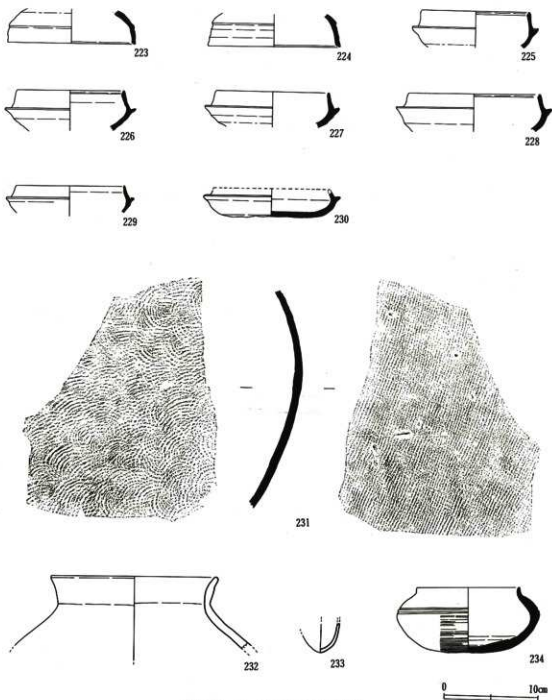
調査区南壁土層によると、現水田耕作土を除くと砂層の上部までに明確なものでは2層の水田耕作土が認められる。いずれも下層に鉄とマンガンの酸化層が認められ、乾田であることがわかる。下位の水田耕作土の下約60%で砂層となるが、その間には人為的な土層は認められない。畦畔と考えられる部分は土層断面図に3カ所認められる。A地点は、東西に伸びる畦畔から南側に枝分かれしたもので、基底部で幅1.5m、高さ20%である。全体に鉄の酸化した赤褐色を呈している。B地点は東西方向の畦畔から北側に枝分かれする畦畔の部分である。A地点と同様、暗灰黄色の水田耕作土中に赤褐色の盛り上がりが認められた。基底部の幅70%で、高さは10%程度である。C地点はB地点と同様に明橙褐色の高まりが認められたが、調査区内では平面的に畦畔が確認されなかったで、調査区外、すなわち南側に枝分かれするものと考えられる。丁度このあたりは、東西に伸びる畦畔が土層断面に縦にかかっており、水田耕作土が薄く、かつ耕作土下の層の酸化が強い。

なお、調査区東側では主な2枚の水田耕作土が徐々に傾斜しているが、これは地盤の沈下によるものと考えられる。

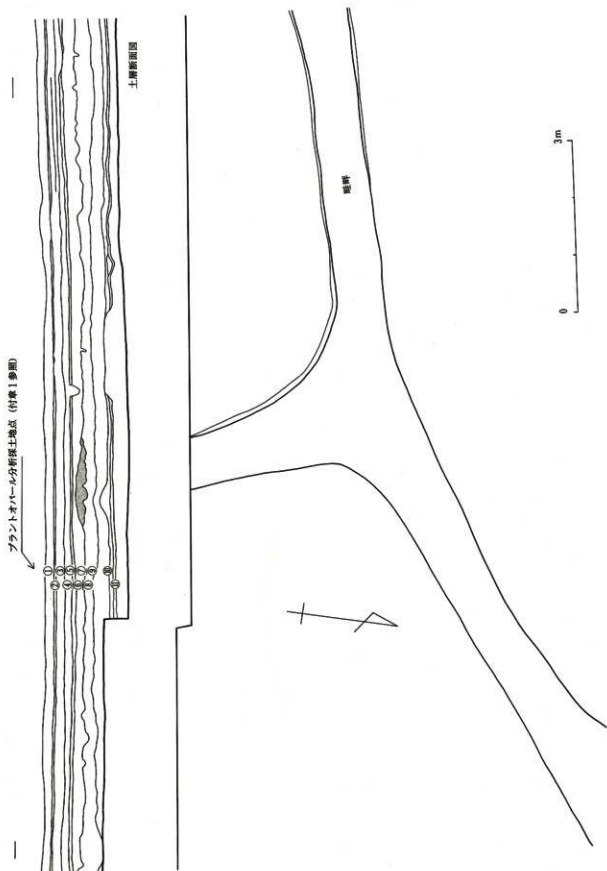
(水田)

前述した駐畔によって最低4カ所の水田面が想定できた。仮に図の様にaからd面とし、それぞれの耕作土下の標高差を出すと、a面と比べb面は5%程度低い。c、d面については僅かに低い程度で、ほとんど差がない。

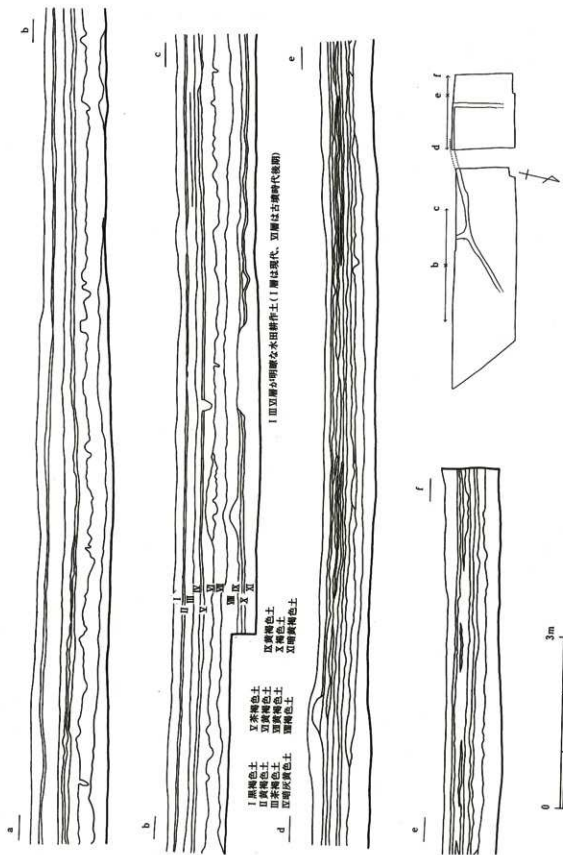
出土遺物には、下位水田耕作土中より234が出土している。



第71図 E、F区水田層出土土器



第72図 F区畦畔の状況



第75図 F区南壁土層断面図

H区

H区は、調査区の中で最も東側に位置する部分で、溝が5条とピット、それと水田跡が検出された。溝は第1号溝から第3号溝は、50%ほどの間隔を開けてほぼ並行しており、D区の溝の状況と類似している。この3本の溝は調査区南壁の土層でみると、弥生時代後期の遺物を若干含む幅約7m（ただし、斜めになっている可能性が高いので、本来の幅はさらに狭かったものと考えられる。）で、深さ50%ほどの皿状の落ち込みの上面に掘られているのがわかる。この皿状の落ち込みは、残念ながら平面的に追うことはできなかったので溝になるのかどうかわからないが、下底面にやや粘質の強い土層があり、上層には砂層があることから、溝（あるいは旧河道）の可能性が高い。<sup>10)</sup>

第4号溝との时期的な関係が窺われるが不明とせざるを得ない。第4号溝は、「コ」字状に屈曲する溝であるが、性格は不明である。

水田は、調査区全面に広がらずに第2号溝付近から西側に広がる。水田の時期は明確な遺物が出土しておらず不明であるが、中・近世の遺物はまったく出土しておらず、それ以前である可能性が高い。

<註>地形図を見ると、この皿状の「溝」の北側延長線上には湾曲する旧河道と思われる水田が伸びている。逆に南側は、「カワタ（川田?）」と呼ばれる旧河道が認められる。つまり、ある時期、七瀬川がやや北側を流れていたときの河川の1本が、この旧河道と考えられるのである。



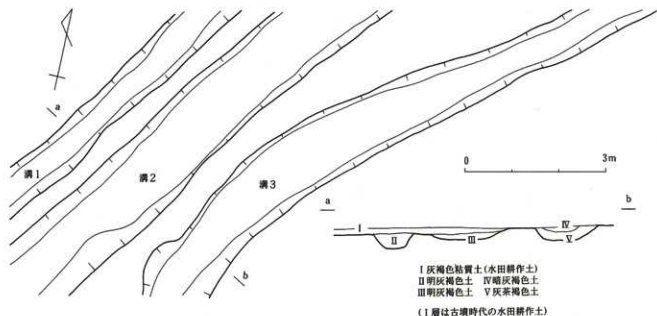
第74図 H区遺構配置図

(第1号、2号、3号溝)

第1号溝から第3号溝は、ほぼ並行して南西方向から北東方向に伸びている。

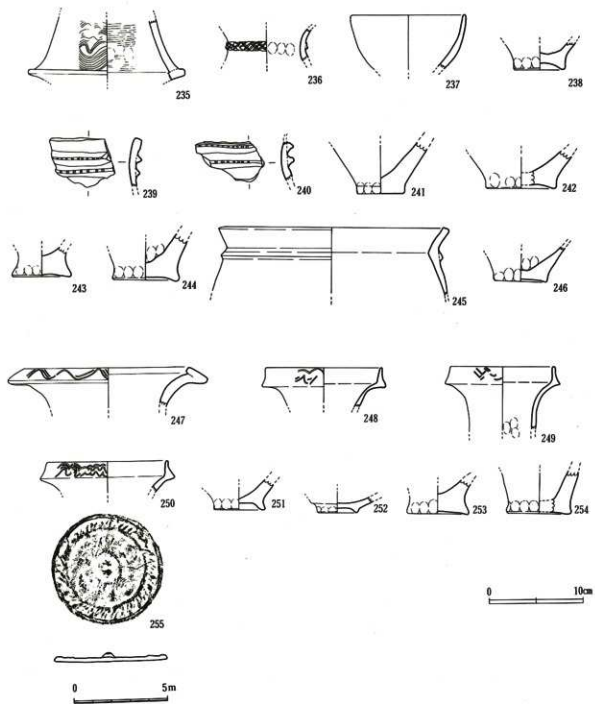
第1号溝は幅0.9mで深さ25%、第2号溝は幅1.4mで深さ15%、第3号溝は幅1.3mで深さ30%であり、いずれも浅い逆台形を呈する。内部の堆積状況はいずれも明灰褐色土である。

遺物は、235から246で、第1号溝内からは仿製鏡が出土した。鏡は狭縁で、斜行飾歯文帯一文様帯一圏線一鈕となる。文様は不鮮明。鏡厚は2mm程と厚い。



I 灰褐色粘質土 (水田耕作土)  
 II 明灰褐色土  
 III 明灰褐色土  
 IV 暗灰褐色土  
 V 灰茶褐色土  
 (I層は古墳時代の水田耕作土)

第75図 H区溝1、2、3実測図

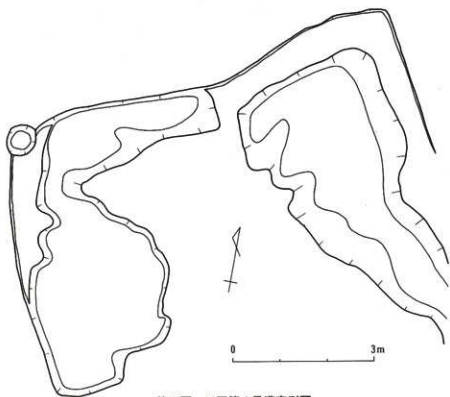


第76図 H区溝1、2、3、4出土遺物実測、拓本図

(第4号溝)

明確な掘り込みを持たないが、「コ」の字状に折れ曲がる浅い溝状遺構。幅は、広いところで3m、深さは深いところで30cmで、おおむね10cm程度である。流水などの痕跡はなく、また「コ」の字形に囲まれた内部にも何ら遺構は認められなかった。

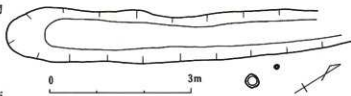
遺物は、比較的大きな破片が出土している。247から254で、時期は弥生時代後期中葉である。



第77図 H区第4号溝実測図

(第5号溝)

第4号溝の南側にあり、幅約1m、深さ25cm程度の規模ではほぼ直線的に伸びている。出土遺物はなく時期、性格ともに不明である。



第78図 H区第5号溝実測図

(水田)

水田層は図の網かけ部分に広がっていた。上面には砂層の堆積が認められず、良好な状態ではなかった。また、出土遺物も細片のみであり、時期

や構造を明確にできるものではなかった。しかし、土層の色調や混入物などは、E区などで確認された古墳時代後期の水田耕作土と酷似しており、状況から同時期と考えることができよう。

3. 小結

遺構・遺物の内容については今まで述べてきた通りである。ここでは、この地区の土地利用の変遷についてまとめおきたい。まず、調査で出土した最も古い遺物はH区で出土した弥生時代後期の土器である。出土遺構は

溝であるが、どのような性格のものであったかは不明である。しかし、古墳時代前期と考えられる3条の溝の下層に確認された溝が想定したように旧河道（弥生時代後期の土器を含む）であれば、それとの関連も考えられよう。

その後古墳時代前期にはD区において住居が築かれる。この場所は周辺部に比べてやや高く、沖積微高地にあたる。さらにこの微高地の周辺部に3本の溝が掘られる。この溝がどのような性格のものであったのかは、調査範囲の関係で明確には判らなかったが、水路か集落を巡る環濠の一部であったのかのいずれかであろう。

前者であった可能性は、溝の堆積状況から窺える。ただし、それが集落を画する意味も合わせもっていたものかもしれない、後者の可能性も残しておきたい。同様の溝はD区とH区で検出されており、仮に環濠であればこれを結び、さらに調査区北側への微高地の広がりなども考慮すると、東西200m以上の楕円形となる。<sup>40)</sup>

水田はE区からH区にかけて検出された。時期は水田耕作土から出土した須恵器によって比定を行った。良好な出土状態ではないが、まったく後世のものを含まず、純粋な遺物包含であったことから時期は間違いないと考えてよい。

<註>D区の溝底とH区の溝底の標高差は約20<sup>2)</sup>ある。



第79図 植田条里遺跡の古墳時代水田の広がり